

2022年12月1日

みずほディーラーズアイ (2022年12月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 131.00 ~ 145.00

市場営業部 為替営業第一チーム 松木 悠馬

■ 先月の為替相場

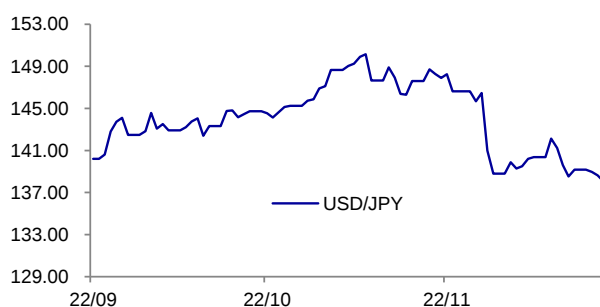
11月のドル/円はFOMCや米10月雇用統計を消化後、米10月消費者物価指数が市場予想比で下振れたことで8月以来の水準まで急落した。月初ドル/円は148.73円でオープン。2日、FOMCでは予想通り大幅利上げしたものの、次回会合での利上げペース鈍化観測が高まると、ドル/円は145.68円まで急落。ただ、利上げ停止に対しては慎重な姿勢を示したことでドル買いが加速し147円台後半まで急反発した。3日、北朝鮮によるミサイル発射の報道を受けリスクオフの円買いが強まり147円台前半まで下落。4日のドル/円は米10月雇用統計が予想を上回る結果となるも失業率は予想比弱めの結果。米長期金利の低下とともに146円台半ばまで下落。次週、7日、146.89円でオープンしたドル/円は、中国当局者によるゼロコロナ政策堅持への発言を受けドル買い優勢となり、147.55円まで上昇。8日と9日は米中間選挙等を控え様子見ムードの中、145円台前半から146円台前半程度でのレンジ推移。10日のドル/円は米10月CPIが公表され、総合、コアペースとも市場予想を下回ったことが材料視されると強烈なドル売り相場となり、140.20円まで下落した。11日は米11月ミシガン大学消費者信頼感指数が予想を下振れ、FRBの利上げペース減速観測が一段と強まったことも相場の重しとなり、138.46円まで下落。第3週、139.61円でオープンしたドル/円は押し目買いも入り140円台後半まで上昇するも、FED高官のハト派発言を受けドル/円も140円を割った。15日、米10月生産者物価指数(PPI)が市場予想を下回ったことが材料視され、137.67円まで急落。その後はポーランドへのミサイル着弾を受けたリスク回避のドル買いが散見され、139円台前半を回復。16日、17日、18日のドル/円はFed高官のまちまちな発言を消化し140円台を挟んで越えた。第4週の週初21日、ドル/円は、ドル買い優勢もあり142.25円まで上昇。23日、米11月PMIが市場予想対比で軟調な結果となり景気後退懸念が加速したことや、11月FOMC議事要旨において近い時期での利上げペース鈍化が支持されたことを受け米金利は低下し、ドル/円も139円台半ばまで下落した。第5週の28日、139.36円でオープンしたドル/円は中国のゼロコロナ政策への抗議活動等の影響からリスクオフの円買いが優勢となると月安値となる137.50円まで下落。その後はFed高官のタカ派発言もあり値を戻した。29日、月末絡みの実需のフロー等がある中、138円半ば付近を中心に下にいったいこの展開。30日、ドル/円は月末のフロー絡みの相場となり、138円台での推移となった。

■ 今月の見通し

12月のドル/円は上値重い展開を予想する。12月14日に予定されているFOMCでは+50bpsの利上げがほぼ織り込まれており相場への影響は限定的と予想する。ただ、11月のFOMC議事要旨では参加者の大部分が利上げペースの減速がまもなく適切になるとの見方を占めていたことを踏まえ、12月FOMCにて今後の利上げペースの減速やターミナルレートについて具体的な発言には注目したい。利上げペースの減速を裏付ける結果としてヘッドライン・コアともに市場予想を下回った米10月消費者物価指数が挙げられる。依然として物価目標の2%には程遠いものの、10月のインフレ指標やミシガン大学1年先インフレ率が軒並み低下したことは、インフレのピークアウトを示唆する内容となった。今後、発表されるインフレ関連の指標が市場予想を下回れば、米利上げペース減速をより強く意識させる結果となり米金利の低下とともにドル/円は再び下を試す展開を予想する。ただ、足元のFed高官の発言は利上げ織り込みを剥落させる市場の動きを牽制するタカ派な発言が多いことに加え、日米金融政策差に伴う金利差は依然として意識される為、下落スピードは遅く130円台は維持されると予想する。ドル/円の直近の値動きに関して言えば、ドル/円は140円台に乗せても、ネガティブニュースへの反応スピードが速く130円台への戻しが早い。テクニカルにみても転換線が基準線を下回っており売りシグナルが出ている為、下落圧力は強いだろう。中国のゼロコロナ政策にも注目したい。中国国民によるゼロコロナ政策への抗議活動が続く中、政府の政策転換を図る材料となった感がある。一部では徐々に生産や日常生活を再開させる方針が示されており、中国全土でゼロコロナ政策解除に関する発表等があれば、経済再開への期待感からCNHが対ドルで買われ、ひいてはドル/円の下落要因の1つとなるだろう。ドル/円は為替介入以降流動性が低くなっていることに加え、クリスマスシーズンに入り市場参加者が減ると、基本的に動意に欠ける展開となるだろう。ただ、ヘッドラインや大口のフロー等で方向感が出れば極端で荒い値動きとなる可能性があるため留意したい。

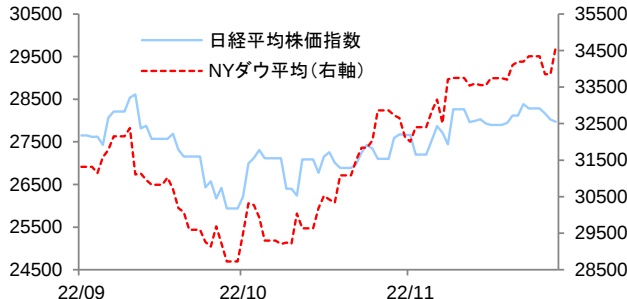
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	米ISM製造業景況指数	10月	50.0	50.2	50.9
11/2	FOMC政策金利(上限)	11/2	4.0%	4.0%	3.25%
11/4	非農業部門雇用者数変化	10月	193K	261K	315K
11/4	失業率	10月	3.6%	3.7%	3.5%
11/10	米消費者物価指数	10月	7.9%	7.7%	8.2%
11/12	米ミシガン大学消費者マインド	11月	59.5	54.7	59.9
11/15	米生産者物価指数	10月	8.3%	8.0%	8.4%
11/16	米小売売上高	10月	1.0%	1.3%	0.0%
11/23	米製造業PMI	10月	50.0	47.6	50.4

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	4名	143.00 ～ 135.00	ベア	14名	142.00 ～ 134.00
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

宮地	ベア	140.00 ～ 132.00	日米間の金融政策の差異は継続も、米金利の上昇圧力が一服していることや世界的な利上げサイクルの騰勢鈍化に加え、本邦サイドの需給環境にもやや変化がみられることを踏まえると、短期的にはドル円の下値を探る展開を予想。
筒井	ブル	143.00 ～ 136.50	米景気下振れ懸念・円金利上昇懸念から、為替オプション市場では円高リスクを織り込む。日本の賃上げが明確になるのは5月であり、米政策金利が高止まりすることを勘案すれば、金利差に注目したドル高円安に回帰するだろう
加藤	ベア	142.00 ～ 132.00	依然調整局面が続く。米当局者からは強気な発言が一部続いているが、性急な利上げが実体経済に影響を与えてきていることは明白で、早晚雇用に対する影響を無視できなくなるだろう。季節要因も重なり12月もドルの上値が重いと考える。
山崎	ベア	142.00 ～ 135.00	インフレ期待は引き続くものと想定されるが、利上げスピードについてはやや思惑対比で後退するものと想定しており、やや調整されていくと予想。年末の流動性低下局面での値動きにも注意したい。
伊藤	ベア	142.00 ～ 134.00	米政策金利の最終到達点が見え始め、米金利の上昇余地は限定的。次第に景気減速懸念を背景としたリスクオフ相場への移行を意識するフェーズか。依然データ次第ではあるものの、ドル円は上値が重くなっていく見込み。
山岸	ブル	143.00 ～ 135.00	米経済は個人消費・雇用とも堅調さを維持。力強い米景気を背景にインフレ圧力は残存し、FED高官の直近発言でもインフレ楽観論を相次ぎ牽制。「より高く、より長く」金融引き締めが続くとみられ、ドル円の下値は堅いと予想する。
尾身	ベア	141.00 ～ 135.00	米国の利上げ幅の縮小観測によるドル売りと、ターミナルレート引き上げ観測によるドル買いに挟まれて動きづらい相場展開を予想。足元、インフレの減速が見られ、利上げ幅の縮小が織り込まれているため、ややドル売りが優勢か。
上野	ブル	143.00 ～ 135.00	CPI(12/13)とFOMC(12/13-14)の結果次第。12月FOMCでは50bp利上げは織り込まれており、ドットチャートの大幅な修正などのサプライズがなければ、流動性低下とともに動意薄の推移になるのでは。
甲斐	ベア	140.00 ～ 135.00	FOMCにかけて、米利上げ期待は高まると思うものの、ECBによる12月利上げ期待はまだ75bpを折り込んでおらず、ユーロ買いドル売り進展の可能性も。FOMC後にECBという順番もあり、ECBの利上げサプライズでドル売りか

松永	ブル	143.00 ～ 135.00	FRBの利上げペース鈍化は11月中に織り込みが進んでおり、12月FOMCが50bp利上げに留まったとしても、インフレ抑制姿勢が改めて示されれば、再び日米の金融政策乖離が意識され、円安回帰すると予想。
小野崎	ベア	141.00 ～ 135.00	米利上げの終焉も近付いておりドル買いも一服。12月FOMCは利上げ幅減速に注目されることから上値の重い展開か。ただし、130円台では下値を拾う動きも想定されることから130円台後半での値動きが中心となるか。
原田	ベア	141.00 ～ 133.00	前回までのFOMCとは異なり、利上げペースの減速を模索していることから、ドル円上昇のペースは鈍化するだろう。むしろ来年に向けては日銀の次期総裁の話題も出てくることから、ドル円上昇のピークはすでに過ぎたと予想する。
上遠野	ベア	142.50 ～ 134.50	米国利上げペースの減速を既定路線として12月FOMC後から年末にかけてドル売りの流れが一段と強まる展開を予想。米国中間選挙もこなし、なりふり構わぬ物価抑制から景気サポートとの両輪バランス重視にシフトか。
小林	ベア	145.00 ～ 133.00	米FRBはこれまで4回連続で75bpの利上げを実施してきたものの、12月の年内最後のFOMCでは利上げペースの減速が見込まれている。かかる状況下ではドル買いトレンド収束、下値を試す展開と想定。
逸見	ベア	142.00 ～ 132.00	市場の楽観論をけん制する格好でFedのタカ派寄りな情報発信に警戒が必要なものの、ドル高のピークアウトは根強く、ドル円は上値重い展開が継続。
鈴木	ベア	142.50 ～ 134.00	これまでドル高を牽引してきた金利上昇に一服感がみられる。12月という季節柄、年初から上昇を続けてきたドル円に対する調整も相応に想定されるため、上値の重い値動きとなりそう。
木村	ベア	141.00 ～ 134.00	米金利が世界的な利上げを先導する流れが一服し、円だけが取り残されている悪目立ちの状況が改善。オセアニア通貨はじめドル以外の高金利通貨への資金流入が目立つ中、ドル円で見ると方向感が出にくく、上値重い相場を想定。
大熊	ベア	142.00 ～ 134.00	CPIショック後に急落したドルの戻りは鈍く、地合いの弱さが感じられる。利上げペース鈍化は既定路線となりつつある一方で、日銀の金融緩和を来年度には修正するとの思惑があることから、ドル円は下値を切り下げる展開を予想。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 0.9990 ~ 1.0550
EUR/JPY 140.00 ~ 148.00

市場営業部 為替営業第一チーム 原田 和忠

■ 先月の為替相場

先月のユーロ相場は軟調なドルを背景に、パリティを超えてじり高の展開となった。

月初、中国人民銀行の為替介入に関する報道を受けてドル売り優勢、ユーロはじり高に推移したものの、米経済指標が予想比上振れると0.9870付近まで下落した。2日はレンジで推移。FOMC声明文発表直後は、12月に向けて利上げペース減速が示唆されたことで、0.9976まで上昇。その後パウエルFRB議長から利上げペースと金利水準の議論を区別しつつ、利上げを継続する必要性が強調されたことで、市場はタカ派と捉えドル買い・ユーロ売りに反転した。3日、4日は、米金利の先高感が意識されやすくドル買い優勢。週末にかけて、ユーロはじりじりと値を上げていき0.9960で越週した。

7日、リスクオンのドル売りが進んだことでパリティを回復。週半ばはレンジでの推移が継続。10日、米10月消費者物価指数の発表を控えじりじりとドル売りが進行し、ユーロは一時0.9936まで下落。その後米10月CPIの結果が市場予想を下回ったことで米金利が低下し、強烈的なドル売りとなるとユーロは8月以来となる1.02台まで急伸した。11日も前日のドル売りの流れは緩まず、ユーロは1.03台に乗せた。

14日は、ドル買い相場の中、1.0272まで下落したが、ブレイナードFRB副議長の発言を受けた米金利低下を背景に1.03台を回復した。15日、ユーロは米10月生産者物価指数の弱い結果を受け、1.0481まで急伸もその後はドルの戻り買いもあり1.03台を推移した。16日から18日は、ドル買いフローで一時的に下げる場面もあったものの、総じて1.03台後半を方向感なく推移した。

21日、ドル買い相場の中、原油価格上昇を受け域内のエネルギー供給不安を嫌気したユーロ売りが強まったことも相まって下落した。22日、23日は、市場予想対比で軟調な米経済指標や、米利上げペース鈍化が支持された11月FOMC議事要旨の内容を受け、米金利低下とともにドルを手放す動きが強まる中1.04台を回復した。24日、ユーロ/ドルは前日からの流れが続く中、底堅い推移となった。25日は目新しい材料のない中、動意を欠く展開。終日を通して1.04を挟んで方向感のない推移となった。

28日、ECB理事会のクノット氏のタカ派なコメントで1.05手前まで上昇後も、1.05レベル乗せに失敗したことで、戻り売りの展開。その後も月末にかけては材料待ちの展開となり、レンジ内の動きにとどまった。

■ 今月の見通し

今月のユーロは上値の重い推移を予想。ウクライナ情勢やエネルギー供給不足等の懸念を抱えるユーロが買われにくい地合いが続くだろう。

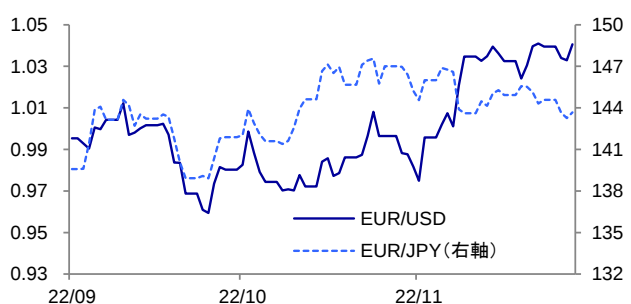
欧州のエネルギー供給問題については、12月の本格的な冬の到来により、エネルギー消費が増加することで顕在化するとみられる。欧州の経済指標をみると、エネルギーに影響を受けやすいセクターが減速傾向を示しており、インフレ率の高止まりが家計を圧迫することは確実だ。エネルギー供給問題が欧州圏内の不透明感を高めており、ともすればスタグフレーションに陥る可能性もある。ECBのチーフエコノミストであるレーン理事は、エネルギー供給問題が高インフレや景気減速につながっていると考え、エネルギー供給問題というサプライサイド側の要因は徐々に解消され、来年にはこのエネルギー主導のインフレは落ち着くと予想している。ただし、それも来年に入ってから議論であり、足許は欧州圏内の不透明感は一つもぬぐえていない。

対して米利上げのペースは、今月から減速が見込まれている。今年に入り、4%以上の早急な利上げを実施しており、運行する利上げの影響について見極める時期に来ている。現にマーケットでは、先月の米CPI下振れによって利上げスピードの鈍化が急速に織り込まれドル売りにつながった。よって、利上げサイクルが終わりに近づけば近づくほど、ドル高も頭打ちになるとみられる。昨年来、米国の利上げに合わせてドル買いが続き、ユーロは夏場にパリティ割れを示現。足許は、米利上げスピードが鈍化し、今月のFOMCでは50bpsの利上げにとどまる見方が大宗を占める状況において、ユーロは9月の底値から反発基調となっている。

とはいえ、米国が利上げによる金融引き締めを行うという事実と、利上げの最終到達点はまだ先になることから、ドルのユーロに対する優位性は変わらないだろう。利上げによる景気減速不安は欧州及び米国ともに抱える不確定要素であり、エネルギー供給問題やウクライナ情勢という不確実性をさらに抱えるユーロにポジションは傾けにくい。よってユーロの上値は限定的となり、パリティ近辺での軟調推移を予想する。

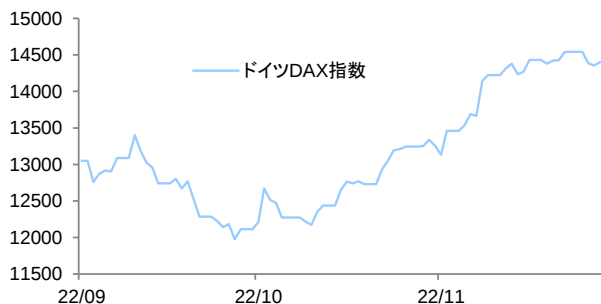
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/3	英BOE政策金利	11月	3.0%	3.0%	2.25%
11/8	ユーロ圏小売売上高(前月比)	9月	0.2%	0.5%	-0.3%
11/15	ZEW景気期待指数	11月	-51	-36.7	-59.2
11/15	ユーロ圏貿易収支(季調済)	9月	-42.0b	-37.7b	-47.6b
11/15	ユーロ圏GDP前期比(速報)	3Q	0.2%	0.2%	0.2%
11/23	ユーロ圏製造業PMI(速報)	11月	46.0	47.3	46.4
11/23	ユーロ圏サービス業PMI(速報)	11月	48.0	48.6	48.6
11/24	独IFO景況感期待指数	11月	77.0	80.0	75.9
11/29	ユーロ圏消費者信頼感指数	11月	-	-23.9	-23.9
11/30	ユーロ圏CPI前月比(速報)	11月	0.2%	-0.1%	1.5%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ

ブル	7名	1.0700 ～ 1.0100	ベア	11名	1.0600 ～ 1.0000
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

宮地	ブル	1.0700 ～ 1.0250	米金利上昇の圧力の低下やドル調整の流れが続くことでユーロは底堅く推移するものと想定。一方、欧州景況感の弱さやロシア侵攻等ネガティブな材料も残存するなか、ドル売りがユーロの下値をサポートす格好となろう。
筒井	ベア	1.0500 ～ 1.0100	供給制限に伴う高インフレを積極的な利上げで対処しているが、これはユーロ圏経済に著しい経済成長鈍化を招く。ECBによる利上げは早晚停止される可能性高く、その影響を通貨安として反応するだろう。
加藤	ベア	1.0600 ～ 1.0000	12月は中旬以降季節要因でドル売りが強まる可能性があり、更にQTがECBで決定されることも考えると一時的にユーロ上昇余地はある。しかし基本的なファンダメンタルズは下方向を示唆しており、戻り売りのスタンスで構えておきたい。
山崎	ベア	1.0700 ～ 0.9900	ゼロコロナをめぐる中国に対する不安感の高まりや、ウクライナ問題もくすぶり、ユーロは一旦小休止か。年末を控えて一方向に進みづらく、一旦は調整されるものと予想。
伊藤	ベア	1.0600 ～ 0.9900	FEDPIVOTを意識したドル売りやECBの利上げ期待を背景にEURは11月に上昇したものの、エネルギー危機がEURの上値を抑える状況に変化はないか。景気減速懸念を背景としたクロス円の上値の重さもEURの上昇を抑えるか。
山岸	ブル	1.0700 ～ 1.0000	物価上昇長期化でECBはインフレスパイラルを警戒。独11月CPI(EU基準)は11.3%上昇、日米を上回る記録的なインフレが続く、利上げ余地大きく、ユーロは買われやすいと予想。資源価格の落ち着きもユーロ需給にプラス材料。
尾身	ブル	1.0600 ～ 1.0100	FEDの利上げ幅縮小観測によるドル売りにより、ユーロの上昇基調は継続すると予想。但し、ECBも利上げ幅縮小の可能性やユーロ圏におけるインフレピーク説などもあり、上昇は限定的か。
上野	ブル	1.0700 ～ 1.0100	決算期を迎える欧州企業の資金還流の影響からか、EUR/USDは例年12月は陽線を形成することが多く、2000年以降では68%(15/22回)程度。物価動向も未だピークアウトを確認できず、堅調な推移が基本線か。
甲斐	ベア	1.0550 ～ 1.0200	ECBによる12月利上げ期待はまだ75bpを折り込みきれておらず、ユーロ買いドル売りの流れになると予想する。FOMC後にECBという順番もあり、FOMCでドル買い期待が高まっても、ECBの利上げサプライズで反転予想。

松永	ベア	1.0500 ～ 1.0000	ウクライナ問題や中国でのコロナ再拡大など、外部要因に起因するユーロ圏のスタグフレーション懸念から、軟調な推移を予想。ECBの利上げペースの鈍化もユーロの重しとなるとみる。
小野崎	ブル	1.0800 ～ 1.0000	ウクライナ情勢やスタグフレーションなど懸念材料は燦々ものの12月FOMCで利上げの終焉が意識され始めるFRBと比較すればECBの利上げ姿勢は続くことからEUR買いが優勢になる展開を予想。
原田	ベア	1.0550 ～ 0.9990	上値の重い推移を予想。ウクライナ情勢やエネルギー供給不足等の懸念を抱える中、利上げによる不確実要素も重なり、ユーロは買われにくい地合いが続くだろう。
上遠野	ベア	1.0450 ～ 1.0150	高止まりする物価上昇率を背景にECBの大幅利上げ継続およびQT議論の本格化が予想されるものの、ウクライナ情勢の影響やエネルギー不安によって域内経済成長率は下振れ見通しでありスタグフレーションリスクの高まりが警戒されよう。
小林	ベア	1.0600 ～ 0.9800	インフレを抑え込むためECBによる追加利上げが見込まれているものの、ウクライナ情勢・エネルギー供給問題・欧州域内の景気低迷等を背景に積極的なユーロ買い相場は想定しづらく、ユーロは軟調推移を予想。
逸見	ブル	1.0600 ～ 1.0200	地政学リスクの高まりやインフレによるリセッション懸念など、ユーロを積極的に買い進める理由はないものの、ドルのピークアウトとともに欧州の大幅利上げ継続によって、ユーロは底堅い推移を予想。
鈴木	ベア	1.0600 ～ 1.0000	米国の利上げペース鈍化の思惑によるサポートは受けているものの、エネルギー供給問題や景気減速懸念など依然として課題は多い。上昇余地は限定的であり、上値の重い値動きを予想する。
木村	ベア	1.0600 ～ 1.0100	ECBがインフレ抑制のための大幅利上げに積極的な姿勢であるが、スタグフレーション懸念が強いEU域内の状況を鑑みるとユーロ買いは長続きしにくいと思われ、コモディティ価格を睨んだ神経質な相場になると想定。
大熊	ブル	1.0650 ～ 1.0050	12月のECB理事会は利上げ幅縮小に傾いていると見る向きがあるものの、高インフレを受けて景気ある程度犠牲にしてもインフレを抑止するという姿勢は継続。米国よりも利上げは長引くとの思惑から、ユーロは底堅い展開を予想する。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.1900 ~ 1.2400
GBP/JPY 165.00 ~ 173.00

欧州資金部 ジョセフ・マクルヒル

■ 先月の為替相場

先月の英ポンドは、対円と対ユーロでは、値幅はそれなりにあったものの、振り返るとレンジ内の値動きにとどまった。特にユーロに関しては、9月末の英財政計画発表後の英国債価格暴落とそれに伴ったボンドの急落以降は、0.8570-0.88での膠着状態が2か月も続いている。対ドルでは、ドル自体が牽引した展開だったとはいえ、1.16台から1.20台まで、明確に水準を上げた。10月末でドルが買われた流れを引き継ぎ、月初1.12台まで下落していたボンドだが、4日にBOEが緊急ギルツ買いオペのアンバインド詳細を近々公表すると報道を受けて英国債は金利上昇し、市場はボンド買いが優勢に。同日の米10月雇用統計の発表が相まって全般的なドル売りが強まったことで、翌5日の夕方には1.15台半ばまで上昇し、対円でも165円台から169円台まで急伸した。その後、10日発表の米10月消費者物価指数の結果待ちムードが続いたが、同指標が海外時間に公表され、総合、コアベースとも市場予想を下回ったことが材料視され強烈なドル売り相場となった。ボンドは一時対ドル8月下旬以来に1.17台を突破し、堅調推移に。15日に発表された米10月生産者物価指数の市場予想を下回る結果となったことでドル売りが加速し、ポンド・ドルが一時的に1.20台まで急伸したが、すぐに1.18台まで押された。対円と対ユーロでは横ばい推移となった。16日は朝方発表の英10月消費者物価指数が前年比+11.1%と41年ぶりの伸び率となる中1.19台を挟んだ値動きに。23日に発表された英11月PMIは製造業、サービス業が総じて市場予想を上回る結果となりボンドが対ドル、対円と対ユーロで軒並みに顕著な上昇を見せる展開に。対ドルでは、米11月PMIの下振れやFOMC議事要旨もドル売りの流れをサポートし、翌アジア時間にかけて1.21超えまで上昇。この間、同日発表された欧州11月PMIも総じて良好な結果となったものの、英ポンドは対ユーロでも大きく上昇し、ロンドン入りの0.87レベルから0.86割れまで下落。対円でも、168円ちょうどレベルから169円まで続伸。翌24日、米感謝祭で動意に乏しい展開となる中、ラムズデンBOE副総裁からインフレ抑制のため引き締めスタンスを維持する内容のコメントが相次いだこともサポートし前日の流れが継続。英ポンドは対ドルで1.2153の月高値、対ユーロでは0.8573の安値までそれぞれ上昇。

■ 今月の見通し

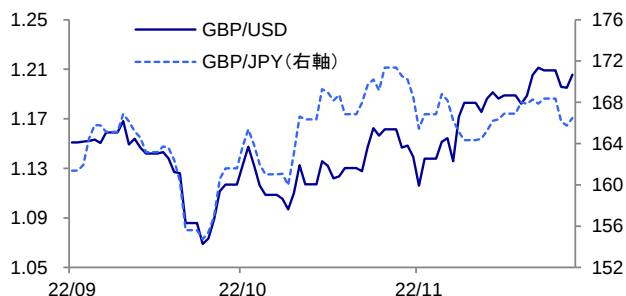
今月の英ポンド相場は、上値重い展開を予想する。特に注意を払いたいのは、10月28日と、11月24日にそれぞれ一回トライされているユーロ・ポンドの0.8573である。仮に12月中、クリスマスシーズン等で取引閑散となり11月で観測されたような穏やかなドル売りが進むような展開があっても、もしこのサポートを割れる局面があれば一気にポンド高が進むといえよう。また、中国でのコロナ感染状況も視野に入れておきたい。11月中、コロナ感染の拡大およびゼロ・コロナ規制の強化などに関するヘッドラインを受けて豪ドルが大きく売られたが、最近上海を中心に行われている、ゼロ・コロナ規制で続いている抗議活動を政府が無視し、コロナ再拡大懸念から規制を強める意思を示せば、豪ドルは下落し、ポンド・豪ドルは上昇すると想像できる。その上、上述した対ユーロと同じく、約2か月こう着状態が続いていることもあり、上にブレイクする展開までポンド高に振れた場合はさらに上昇幅を拡大する可能性も十分あると考えられる。英国国内のリスクイベントとしては、16日にの英中銀の政策金利の発表が予定されている。11月24日に金融政策委員会のマン委員とラムズデン副総裁(二人ともタカ派で知られる)が24日に、インフレ率を2%に戻すため、たとえ家計をより圧迫することになっても利上げを続かねばならないと声明しているが、12月会合の利上げ幅の折り込み度は+58ベースポイントとなっており、これも11月の間は殆ど変わっていない。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で2022年一番話題になったこと(人)』
大粒の雨が数時間にわたり地上に降り注いだ後、雨が止み、屋根から不定期なリズムでぼつりぼつりと地面へと落ちる小さな水滴を窓の内側から眺めていると、心の中にある映写機が、何十年も昔の、それまで意図的には思いついたことのないような景色を不意に白黒に映し出すことがある。出入口を塞がれた映画館の一室に閉じ込められた僕の感情は、フィルムが空になるまでの間、ただスクリーンに映るその映像をじっと見つめることしかできない。しばらくして部屋を出る頃には、既にスクリーンに映し出された映像を思い出すことはできず、ただ、その景色が僕の中に残した感情に追われながら、雨が地面から引くまでの時間を過ごすことになる。割烹の閉店後、僕はしばらくの間途方に暮れ、雨上がりのような状態が続いていた。それが、割烹の閉店が引き起こしたかどうかは分からない。ただ、店の閉店が決まって以降、僕の周りでも少なからず物事が動き始めた。別のMに夢中であったピアニストのKは、いくつもの楽章を寄り道しながら序奏に戻り、元のMにプロポーズを果たした。若者のJは、何十年と過ごした故郷を離れ、タバコの煙を吐くようなペースで綴る短編恋愛小説の舞台を、異国の地に移すことが決まった。そしてTimは、これまでになく髪を短く切った。日が昇り沈むまでの間の影の位置のように、僕の気持ちとは別にゆっくりと、しかしはっきりとした形で何か動き出したようだ。それでも、僕自身は解決策が見付からないまま時計の針は進んでいたが、ある日、気が付くと荷物をまとめ飛行機に乗り、生まれ育った場所へと足が向かっていた。地図上には、銀座赤坂麹町、とても見慣れた地名が並んでいる。この地にはパブはほとんどない。ただ、カウンターで旧友につがれたぬるめの日本酒は、白黒だった僕の心の景色に、少しだけ色を加えてくれたような気がする。

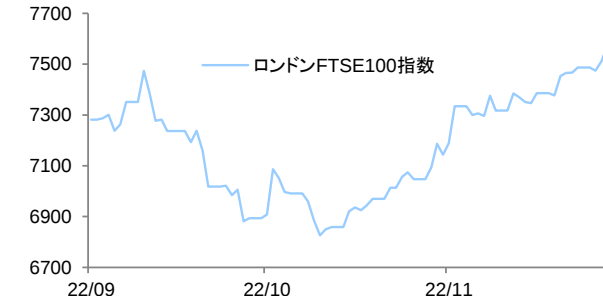
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	製造業PMI(確定値)	10月	45.8	46.2	48.4
11/3	サービスPMI(確定値)	10月	47.5	48.8	50.0
11/4	建設業PMI(確定値)	10月	50.3	53.2	52.3
11/11	鉱工業生産(前月比)	9月	-0.3%	0.2%	-1.8%
11/11	製造業生産(前月比)	9月	-0.4%	0.0%	-1.6%
11/15	ILO失業率	10月	3.5%	3.6%	3.5%
11/16	CPI(前月比)	10月	1.8%	2.0%	0.5%
11/18	小売売上高(含自動車燃料、前月比)	10月	0.5%	0.6%	-1.4%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6350 ~ 0.6930
AUD/JPY 92.10 ~ 95.60

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

11月の豪ドルは0.64近辺でスタートし、2日のFOMCでは市場予想通り75bpの利上げが発表されるも、声明文の内容がハト派と受け止められ一時ドル売りに反応し0.65近辺まで上昇するが、パウエルFRB議長会見では利上げ停止の検討は時期尚早という見方が伝わり、米金利が反転すると豪ドルは0.63半ばまで反落した。3日、米豪の利上げスタンスの対比構造からドル買いの流れが継続し、0.62後半まで下落。4日は中国でのコロナ対策緩和期待につられてAUDにも買いが入り、0.63半ば近辺まで上昇。米10月雇用統計は非農業部門雇用者数が予想を上回り一時ドル買いが進んだが、失業率や平均時給は冴えないものであることから米金利は徐々に低下し、それに伴いAUDが0.6470近辺まで上昇した。10日、米10月CPIへの警戒から、一時0.6387まで下落。米10月CPIが総合・コアともに予想を下回ると、FRBの利上げペース減速が意識され、市場は株・債券高、米ドル安の展開に。豪ドルは0.66台前半まで大きく上昇した。12日、前日の米10月CPIの結果を受けて米ドル安の流れが継続。中国保健当局がコロナ規制を一部緩和との報道なども背景にリスク選好度の高まりは衰えず、株高・ドル安に。豪ドルは0.67台に乗せた。15日は米10月生産者物価指数が予想以上に鈍化したことを受けてドル安が進み、一時0.6797まで上昇した。16日、FRB高官によるタカ派発言から株価が低下し、豪ドルは0.6635まで下落。21日、中国でのコロナ感染再拡大によるセンチメント悪化から0.6585まで下落したが、23日の米11月ミシガン大学消費者マインドでは1年のインフレ期待が後退し、マインド指数が上昇。またFOMC議事要旨では利上げペース減速が示唆された事で0.6780近辺まで上昇し、12月FOMC会合で利上げ幅を+50bpへ減速する方向に傾いているとの思惑から、米金利の下落と共にドル売りが先行し、翌日もその流れが続く度0.67後半まで上昇した。28日は中国でのゼロコロナ政策に対する抗議デモを背景にアジア株が軟調に推移するとドルの逃避買いが進み0.66台前半まで下値を広げた。29日は中国がコロナ対策を巡り会見を行うとのヘッドラインに一部規制緩和がなされるのではとの憶測から、中国株が上昇するとともに0.67台へ乗せた。30日、「iPhone」の世界最大の生産拠点である中国鄭州市で厳格なコロナ制限措置を解除すると発表された事でセンチメントが和らいだ。

■ 今月の見通し

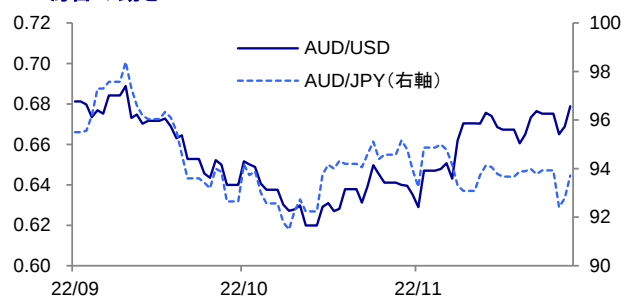
今月はインフレ上昇圧力一服から米豪での金利上昇が落ち着きはじめ、金利差が縮小し、米ドルからキャピタルインフローが豪ドルへ回帰する流れが続くと予想する。

11月RBA会合では市場予想通り25bpの利上げが行われ、豪中銀声明文では2022年末までに豪消費者物価指数のピークが8%を迎えるとの予想が発表され、今後の利上げ継続が意識された。足元の雇用環境もタイトな状況が継続しており、直近の豪10月雇用統計では正規雇用が増加し、失業率は3.4%へ改善した。また賃金指数も上昇が続いており、潜在的にインフレ圧力がかかる条件はなお揃っている。22日の講演でロウRBA総裁は物価変動が一段と不安定になっており、外部要因がコスト押し上げ圧力となり金融政策でインフレ率を狭い目標レンジに維持する事は困難とし、現在の2-3%というインフレ目標を見直す考えを示していた程だった。

一方米国では、米10月消費者物価指数がコア・総合ともに市場予想を下回り、利下げペース減速が意識され、また11月FOMC議事録要旨では「利上げペース減速が近く適切になる可能性が高いと判断した」と記載されていた。以来、市場では12月FOMC会合で利上げ幅を+50bpへ減速する方向に傾いているとの思惑が広がっている。したがって、軟調な米指標が相次ぎ、複数のFRB高官が過度な利上げを牽制し始め、米国での利上げの軌道修正(ペース減速)が確認されれば債券高+米ドル安が進行する事が予想される。また、中国でのコロナ規制に対する抗議デモ拡大で、当局が規制緩和に動くのではとの思惑もあり、センチメントが改善される事でも豪ドルは上値を広げる余地がある。

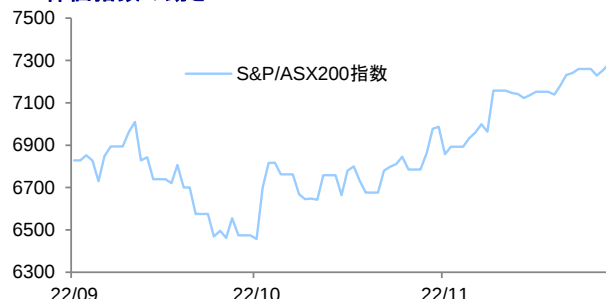
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
11/1	RBAキャッシュレートの発表
11/3	貿易収支
11/16	賃金指数(前期比)
11/16	賃金指数(前年比)
11/17	雇用者数変化
11/17	失業率
11/28	小売売上高(前月比)
11/30	CPI YoY
11/30	CPIトリム平均値(前年比)

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
11月1日	2.85%	2.85%	2.60%
9月	A\$8750m	A\$12444m	A\$8664m
3Q	0.9%	1.0%	0.8%
3Q	3.0%	3.1%	2.6%
10月	15.0k	32.2k	-3.8k
10月	3.5%	3.4%	3.5%
10月	0.5%	-0.2%	0.6%
10月	7.6%	6.9%	7.3%
10月	5.7%	5.3%	5.4%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.3000 ~ 1.3800
CAD/JPY 98.40 ~ 107.00

米州資金部カナダ室 岩田 保子

■ 先月の為替相場

11/2のFOMC後の会見で、パウエルFRB議長はターミナルレートは従来の予想よりも高くなる可能性を示唆した一方で、今後は利上げ幅が縮小される可能性も指摘したことから、USD/CADはそれまでの1.37台からFOMC後は1.35へとUSD売りへと流れが転換。さらに、11/4発表のカナダの10月雇用統計では、ネット雇用者数が予想1万人増に対して、10.8万人と大幅増、失業率も5.2%を維持したほか、正社員の平均時給も前月を上回り前年比5.5%へと上昇。これらの強い結果を受け、USD/CADは1.34台後半へとCAD買いが強まった。中旬は、11/10に発表された米国の10月消費者物価指数(CPI)が前年比でヘッドライン、コア共に前月から低下し、予想も下回ったことから、12月FOMCで利上げ幅が縮小されることへの期待が高まり、米金利が大幅に低下。翌週11/15に発表された米10月生産者物価指数も前月を下回ると、USDは主要通貨に対して急落し、USD/CADも9月以来となる1.3226まで下落した。下旬は11/16にカナダの10月CPIが発表され、ヘッドラインは前月と変わらなかったものの、コアは前月から上昇。しかし、米国の10月CPI以降、USDに売られ過ぎ感があつたことに加え、FRB要人から今後の利上げについてのタカ派コメントが相次いだこと、さらには中国で新型コロナウイルス感染者が再び増加し、需要減の憶測から原油価格が暴落したこともあり、さらなるUSD高・CAD高には進まず、1.33台から1.35手前での取引が続いた。11/29にはカナダの第3四半期GDPが発表され、前期比年率+2.9%と予想(同+1.5%)を大きく上回ったものの、内容的には家計消費が2021年第2四半期以来のマイナス、住宅投資が大きく落ち込むなど、利上げの影響が反映された弱い内容となった。そのため、USD/CADは約3週間ぶりに1.35を上抜けし、USD買い・CAD売りが強まった。

■ 今月の見通し

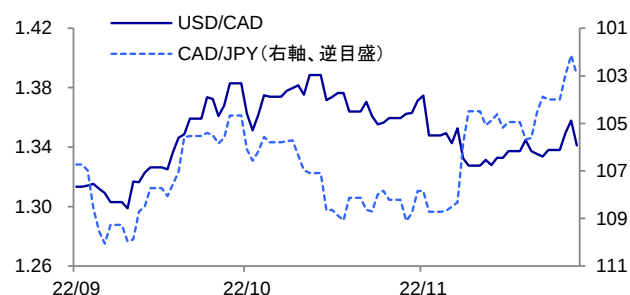
12/7に開催されるカナダ中銀会合では追加利上げが予想されているが、市場では利上げ幅について0.25%か0.50%で分かれている。しかし、カナダはG7諸国において、家計部門の債務残高・可処分所得比(2021年185%、OECD調べ)が際立って高く、債務の大部分が政策金利に連動して急上昇している住宅ローンであることから、ターミナルレートは残り1、2回の利上げ後の4.50%という見方でほぼ一致している。そのため、ターミナルレートが9月予想時よりも高くなる可能性のある米国との金利差は今後さらに大きくなっていくものと思われる。しかしながら、経済指標を見てみると、カナダ・両国ともに利上げの影響が景況感をはじめとする経済指標に表れ始めており、特に米国は今後経済指標を見ながら、利上げの幅を調節してくると思われ、これまでのようなUSDの独歩高という展開は想定しづらい。12月のUSD/CADは1.30~1.38でのレンジ取引を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で2022年一番話題になったこと(人)』
今年カナダで一番話題になったことといえば、2000年以降ほぼ一貫して上がり続け、この10年くらいは毎年バブルだと言われ続けてきた住宅価格が、遂に下がり始めた、ということでしょうか。それはもちろん利上げの結果で、住宅ローンが上がり、買い手が少なくなったことが要因です。住宅価格は今年の2月に平均でC\$816K(約8400万円)のピークをつけた後、徐々に下がり始め、10月はC\$645Kまで下落してきました。もともと住宅の供給数が少ないので、家を買いたいと言う人は大勢いて、その人たちはこの先まだどれだけ価格が落ちるのか、片や売り手は先が読みづらい中、どのタイミングで売りに出そうか、思惑が渦巻いている感じです。個人的に一番話題になったことというか、今年気になったことは、何をするにも時間がかかるようになったことです。行動制限が解除され、マスクなしでどこでも出入りできるようになりましたが、人手不足でパンデミック前に通勤に使っていたエクスプレスバスが廃止となり、これで通勤に往復40分余分にかかるようになりました。またカナダにはTim Hortons(有名なカナダのプロ хоккеイ選手でした)というお手頃価格の国民的なコーヒーショップがあるのですが、オフィス近くのTim Hortonsは、人手不足で採用難なのか、パンデミック前と比べて働いている人が減ってしまい、待ち時間が激増。その結果、もうこのコーヒーショップには行かなくなり、代わって家からサーモスにコーヒーを入れて持ってくるようになりました。この循環が、消費も冷え込ませてくるのだと、はたと気づいた次第です。

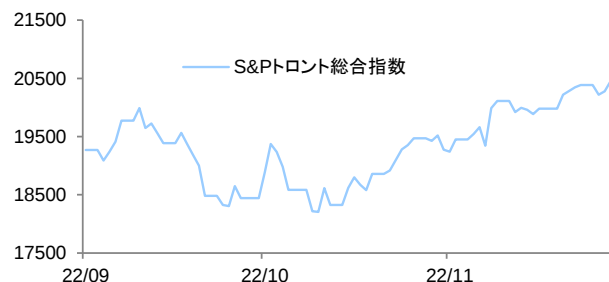
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	ブルームバーク結果	前回
11/3	建築許可件数	9月	-5.0%	-17.5%	12.0%
11/3	貿易収支	9月	1.20b	1.14b	0.55b
11/4	ネット雇用変化	10月	10.0k	108.3k	21.1k
11/4	失業率	10月	5.3%	5.2%	5.2%
11/15	鉱工業売上高(前月比)	9月	-0.5%	0.0%	-1.9%
11/16	住宅着工件数	10月	275.0k	267.1k	298.8k
11/16	CPI(前年比)	10月	6.9%	6.9%	6.9%
11/22	小売売上高(前月比)	9月	-0.5%	-0.5%	0.4%
11/29	GDP(前月比)	9月	0.1%	0.1%	0.3%
11/29	GDP(前期比年率)	3Q	1.5%	2.9%	3.3%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1290 ~ 1350
 KRW/JPY 10.204 ~ 10.870
 JPY/KRW 9.200 ~ 9.800

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 中野 博文

■ 先月の為替相場

11月のドル/ウォン相場は歴史的な反落を記録。10月末の海外時間には著名なFEDウォッチャーが米政策金利の最高到達点について前回FOMCの予想(4%後半)を上回る可能性が高い旨の観測記事を出したこと等あり、1日のドル/ウォンは1,429.6ウォンまで上昇し、こちらが月高値となった。週明けの7日のドル/ウォンは1,411.0ウォンでオープンすると直後から外国人投資家の韓国株買いに押される形でドル/ウォンは下落。8日に節目の1,400を割り込むと、10日に発表された10月米CPI(結果:前月同月比7.7%、予想:同7.9%)、コアCPI(結果:前月同月比6.5%、予想:同6.3%)が予想外に弱い結果となると、特にインフレの懸案となっていた家賃の上昇が鈍化したことが意識され米金利は全年限で20-30bpの大幅低下。市場全体でドルロングポジションの巻き戻しが一気に入り、ドル/ウォンは週間で100ウォン超の歴史的な下落を記録した。週明けの14日からは、市場も徐々に落ち着きを取り戻しドル/ウォンは下値を固めると、16日にはポーランドでのミサイル落下を受けて地政学リスクが意識され、ドル/ウォンは上昇。さらに17日海外時間には複数のFED高官から市場が期待する早期の利上げ停止に対してけん制発言が相次ぎ米金利が反発したと、市場は再びドル買いモードに。週明け22日には10月韓国輸出額(結果:年率▲16.7%、予想:同▲5.5%)が軟調な結果となるとドル/ウォンは1,362.9まで反発した。しかしそこから24日FOMC議事要旨をきっかけとしたドル売りが再び進みドル/ウォンは反落。24日に開催されたBOK会合ではコンセンサス通り25bpの利上げ(3.00%→3.25%)が決定され、利上げサイクルの終了が示唆されるも影響は限定的。結局、月末かけてドル/ウォンの上値は重いままとなり、前月末比105.5ウォン安の1,318.8ウォンにてクローズ。

■ 今月の見通し

12月のドル/ウォンは方向感に乏しい展開を予想する。

12月のドル/ウォンに影響する主な材料は以下の2点。

①インフレ推移と米FEDによる金融政策②BOKによる金融政策

①10月米CPIをきっかけとしたインフレ緩和期待による米長期金利の低下はドル/ウォンを含めたドルロングポジションの解消を引き起こしている。足許のその他のインフレ指標や、雇用・住宅指標を見ても近い将来インフレ率がさらに低下することが期待されており、市場は先回りしてドル売りを行った印象だ。FOMC(12/15)ではFOMC参加者による米政策金利見通しがアップデートされるものの、今の段階ではドル買いのきっかけになりそうな印象は乏しい。

②11/24にBOKは利上げ(3.00%→3.25%)を実施。BOK総裁からは物価見通しについて来年初めまでは5%台を維持するものの、徐々に鈍化して通年では3.6%程度を予想するとともに、景気についても23年下期に回復基調をたどる見込みとし、全体的に利上げ終了を意識させる内容となった。懸案だったウォン安も大きく戻しており、BOKとして政策金利を無理に上げる必要のない状況と考え、こちらをきっかけとしたウォン買い圧力は限定的となる。

以上の通り、米政策金利を期待したドル買い相場終わりつつある一方で、新しく市場を牽引する材料が出てきていない印象だ。次なる市場の材料が明確に出てくるまではドル/ウォンはレンジ相場に移行するのではなかろうか。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で2022年一番話題になったこと(人)』

『当地で2022年一番話題になったこと(人)』はBTSの釜山講演が一般的ですが、私たちからはプロ野球選手であるイ・デホ選手の引退をお伝えしたいです。

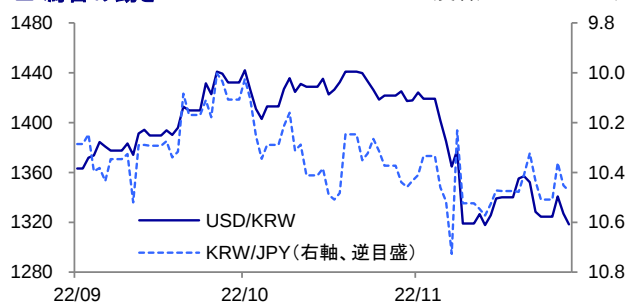
皆さんご存じの通り日本ではオリックス・ソフトバンクでプレーしたプロ野球選手ですが、本年をもって引退となりました。内野手として守備も上手く、卓越した選球眼、柔らかいスイングで流し打ちも得意、広角に打ち分けて長打を量産する打撃スタイルはあまりに有名で、記憶に残っている方も多くかと思えます。数多くの月間MVPを受賞したほか、2015年には韓国入選初日の日本シリーズMVPに選ばれるなど、日本で最も活躍した外国人選手の一人であり、当時を懐かしく思います。

そんなイ・デホ選手ですが、メジャーリーグを経て韓国に戻ってから釜山に本拠地を置く古巣のロッテ・ジャイアンツにて引退する今年までプレーをしており、背番号は永久欠番になるなどファンの皆さんに惜しまれながらの引退となりました。

韓国においてプロ野球はサッカーと並んで人気が高く、テレビを通じてや現地に観戦に行った際にはどのチームもファンやチアリーダーによる応援が盛り上がり、圧倒されました。イ・デホ選手は出場しませんが、年明けにはWBC(ワールド・ベースボール・クラシック)も開催され、韓国も出場予定です。東京ドームにて日本も含めての一次ラウンドの予定ですので、ぜひ各国の応援に行かれてはいかがでしょうか。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	貿易収支	10月	-3500M	-6700M	-3815M
11/1	輸出(前年比)	10月	-2.1%	-5.7%	2.3%
11/1	輸入(前年比)	10月	6.6%	9.9%	18.2%
11/2	CPI	10月	5.7%	5.7%	5.6%
11/9	失業率	10月	2.9%	2.8%	2.8%
11/22	消費者信頼感	10月	-	86.5	88.8
11/24	BOK会合		3.25%	3.25%	3.00%
11/30	鉱工業生産(前年比)	10月	-0.1%	-1.1%	-0.7%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 30.50 ~ 32.20
TWD/JPY 4.40 ~ 4.65

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

11月のドル/台湾ドルは米10月CPIの結果を受けて急落し、約2か月ぶりの台湾ドル高水準に

月初11/1は32.240でオープン。海外への送金需要から一時32.314まで上昇する場面もみられたが、FOMCを控え、様子見ムードに。FOMCではパウエルFRB議長の会見がタカ派な内容であったことを受け、台湾株が下落し台湾ドル売りも売られたが、輸出企業のドル売りが入り上値は押さえられた。その後は米雇用統計の結果を受けて台湾株が上昇し、台湾ドル買いが優勢となると、11/8には32台を割り込んだ。

月央に入ると米10月CPIが発表され、市場予想を下回ったことからドルが全面大幅安となる中、ドル台湾ドルも急落し、11/11には31.30付近まで下落。その後も米CPIの低下から米国の利上げペースが鈍化するとの見方が強まり台湾株は買い戻され、外国人投資家の資金流入が続くと、11/15には31ちょうど近くまで下落した。しかし、NATO加盟国のポーランドにミサイル着弾との報道からリスク回避の動きもあり、台湾株高台湾ドル高の流れは一服した。

月後半に入ると31.20付近での推移が続いたが、FOMC議事録を受けて米国の利上げペースが減速するとの見方から台湾株がじりじりと上昇すると台湾ドル買いが優勢に。11/25には31台を割り込み、一時30.836まで下落し、約2か月ぶりの水準に。月末にかけては外国人投資家の売り買いが交錯したものの、月末の輸出企業のドル売りもあり、31を割り込んだ水準で推移した。

■ 今月の見通し

12月のドル/台湾ドルは米国の経済指標、利上げに左右されるであろう。

11月については米10月CPIを受けて米国の利上げペースの鈍化への期待から、台湾株が買い戻され、外国人投資家の資金が流入したことで台湾ドル高となった。しかしながら、足許の台湾の経済指標は冴えない。輸出額は前年同月比で2か月連続マイナスとなり、輸出に支えられた好景気はピークを迎えている。輸出受注額を見ても前年同月比でマイナスが続いており、台湾の最大の輸出相手国の中国のゼロコロナ対策の修正もすぐには期待できそうにない、今後も輸出は減ると見込まれる。

12月については、米国の動向に大きく左右されるであろう。10月米CPIの影響は台湾でも大きく、株高台湾ドル高の流れに繋がったが、12月も同様に大きく影響すると見込む。利上げペースへの減速が高まっている中、CPIが予想より下がらない、FOMCが0.75%の利上げを決定した場合には大きく台湾ドル安に戻る可能性もあるため、十分に警戒したい。

なお、12月は台湾でも金融政策決定会合を控えており、金融引き締め政策が続くと見込まれる一方、景気の減速から利上げを見送るとの見方もあり、長期金利は低下している。楊台湾中銀総裁からは米台の金利差が為替レートを決めているわけではない旨の発言がある通り、台湾の利上げが直接為替相場に影響するわけではないが、注意していきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

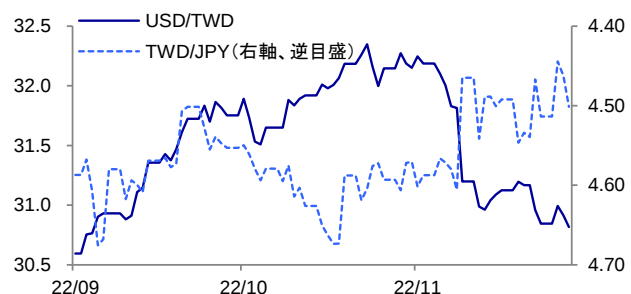
『当地で2022年一番話題になったこと(人)』

一番の話題というとコロナの規制緩和でしょうか。2021年までは域内で感染拡大しても規制により抑え込めてきましたが、オミクロン株の感染力は強く、2022年は台湾でも域内感染が拡大しました。しかし、ワクチン接種率が高まったことと弱毒性から共存への方向に舵を切り始め、入境後の検疫も徐々に短縮され、ノービザで隔離なしで入境出来るようになりました。マスクについても、着用が義務付けられていましたが、12月からは屋外については着用が不要になります。まだ観光客は少ないように見られますが、出張者については街中でそれっぽい人を多く見掛けるようになりましたし、他の会社の人に話を聞くと出張者が増えているとのこと。

日本に関するところでは、日本のマーチングコンテストの強豪校、京都府高校の吹奏楽部が中華民国の建国記念日の式典でマーチングを披露し、話題になりました。学校の間テストの直前の本番であったことから、テストを気遣う声を掛けるような場面もあり、細かいところまで注目されましたが、一部では高校生をプロパガンダに使うことへ疑問視する声も。個人的にはコロナ禍で音楽関連のパフォーマンスを披露する機会が減少していた中、このような批判も含めて海外で演奏する機会があったことは、非常に貴重な経験であったのではないかと思います。

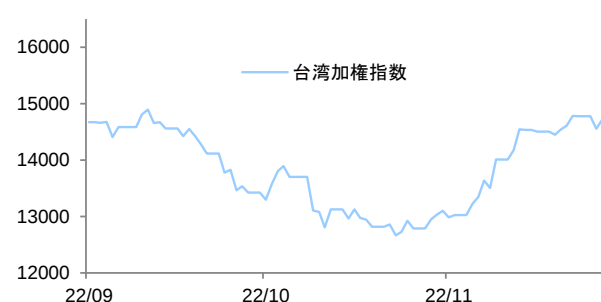
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/4	外貨準備高	10月	-	542.79B	541.11B
11/8	CPI (前年比)	10月	2.80%	2.72%	2.76%
11/8	輸出 (前年比)	10月	-6.0%	-0.5%	-5.3%
11/8	輸入 (前年比)	10月	-5.0%	8.2%	-2.4%
11/8	貿易収支	10月	4.90B	2.99B	5.02B
11/21	輸出受注 (前年比)	10月	-1.9%	-6.3%	-3.1%
11/22	失業率	10月	3.60%	3.64%	3.64%
11/23	鉱工業生産 (前年比)	10月	-2.75%	-3.56%	-4.49%
11/29	GDP改定値	3Q	4.10%	4.01%	4.10%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7950 ~ 7.8400
HKD/JPY 17.20 ~ 18.60

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【11月の香港ドル直物相場】

米国連邦準備理事会(FRB)による先々の利上げペース減速が意識され、米ドル売り圧力が強まったことを受けて香港ドル直物相場は上昇した。ペッグ制の下限である7.85近辺から離れ、一時は9カ月ぶりの水準となる7.8004レベルまで香港ドル高が進んだ。香港ドルの押し上げ圧力となった主な要因は、米ドル買い/香港ドル売りキャリートレードの巻き戻しである。同トレードのリターン水準を測る上で重要な指標である香港ドルT/Nフォワードポイントは、5日平均で3月以来となるプラスに浮上していた。数回に渡って実施されたHKMAの米ドル売り/香港ドル買い為替介入に伴い、香港ドルの市中流動性が減少したことで需給環境が変化し、キャリートレードの妙味が低下したことが大きいだろう。また、中国が入境規制の一部緩和を発表したことが市場の期待を高め、株式市場が堅調な値動きとなったことも香港ドル需要を押し上げた。経済指標に目を向けると、第3四半期のGDP成長率は前年同期比4.5%減と3期連続のマイナス成長となった。香港政府は域内からの輸出と中国経済の見通し悪化を受け、0.5%減から0.5%増としていた2022年の年間GDP成長率見通しを、3.2%減に大幅に引き下げている。その一方で、国際金融リーダー投資サミットや7人制ラグビーの大会である「香港セブンズ」等、香港の復活を印象付けるイベントの開催も目立った。

【11月の香港ドル金利市場】

香港ドルの市中流動性減少と年末超え資金調達を見据えた季節性資金需要により、香港ドル短期金利は上昇した。香港ドルHIBORを見ると、1か月物香港ドルHIBORは1か月物の米ドルLIBORとほぼ同程度で推移したのに対し、年末超え期間となる3か月物の香港ドルHIBORは5%を超え、3か月物の米ドルLIBORを50bp上回る水準まで上昇した。実際にHKMAのアグリゲートバランスを見てみると、3月時点で3,375億香港ドルであったのに対し、現在は1,000億香港ドルを下回っており、市中の香港ドル流動性が大きく減少していることが確認できる。中期金利に目を向けると、FRBが近く利上げペースの減速を検討すると示唆し始めたことを受け、3年物香港ドルスワップ金利は一時4.5%近辺まで低下した。香港ドルの長短金利差(3か月物HIBOR-3年物スワップ金利)は2020年後半以来で初めてプラスに転じ、今後数年の間に米国が利下げサイクルへ反転するとの市場の織り込みを反映している。

■ 今月の見通し

【12月の香港ドル直物相場】

12月のFOMC政策決定会合でFRBが50bpsの利上げを実施すれば、米ドルの短期金利差は再び上昇すると見られるが、年末超えを意識した香港ドルの強い季節性需要が圧力となり、香港ドル短期金利も高水準で推移すると予想している。これにより市場参加者が米ドル買い/香港ドル売りキャリートレードのポジションを積極的に再構築する可能性は低いとみられ、年内の香港ドル直物相場はペッグ制の下限である7.85から離れた水準での推移が続くだろう。しかし一方で、これによりHKMAによる米ドル売り/香港ドル買い為替介入も落ち着き、香港ドル流動性の減少は一服する為、一段の香港ドル高方向へ進む為には、FRBが利上げサイクルの終了時期を示唆する等、米ドル安圧力が強まる材料が必要だと考える。従って香港ドルはしばらく取引バンドの7.80から7.85にかけての水準に留まると予想している。その他には、中国のゼロコロナ政策緩和が現実味を帯びてくれば、香港の株式市場にも追い風となり、域外からの資金流入が香港ドル直物相場の上昇圧力として働くだろう。

【12月の香港ドル金利市場】

年末超えを意識した季節性需要を背景に、香港ドルの短期金利は底堅い水準を維持し、香港ドルと米ドルの短期金利差(HKD HIBOR-USD LIBOR)は来月もプラス圏で推移するだろう。HKMAによる為替介入や香港ドル流動性の減少が一服していることから、一段の金利上昇幅は限定的になると見ている。一方で、香港の銀行のプライムレート(最優遇貸出金利)と1か月物HKD HIBORの金利差が縮小しており、FRBはさらに12月に50bpの利上げを実施すると想定されていることから、香港の銀行はプライムレートをさらに25bp引上げる見通しだ。FRBの利上げサイクル一服を期待するのはまだ時期尚早であり、短期香港ドル金利は高水準を維持するだろう。しかし、香港ドルのスワップ金利は、FRBが今後数年のうちに方針転換するとの期待を織り込みながら、上値の重い展開が続くと考えている。

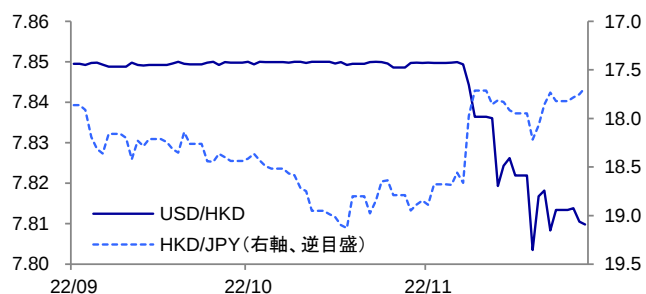
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『2022年の香港で一番話題になったこと』

香港の人々の間では、移住に関する話題が関心を集めています。近年の社会情勢の大きな変化と、厳しい新型コロナウイルス感染対策が続いたことから、域外への移住という選択肢を真剣に考える人が増えました。書店に行けば、移住における住居、税金、子供の教育等についてのアドバイスが書かれた本が目につきます。一方で現実的に考えると、移住は簡単な選択ではなく、様々な面での検討が必要になるはずです。ただ、身近な友人や家族が香港を離れる場合も多い為、最近では誰が移住した、という話題が仲間内でもよく話されています。移住先として最も人気があるのは英国で、インターネット上の動画サイトでも英国への移住に関する動画が簡単に見つかります。

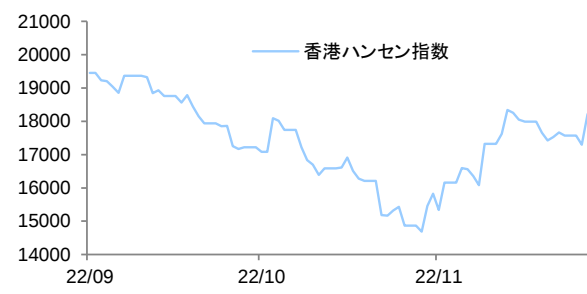
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/31	GDP(季調済/前期比)	3Q A	1.3%	-2.6%	1.0%
11/1	小売売上高(価額/前年比)	9月	1.7%	0.2%	-0.2%
11/3	S&P Global Hong Kong PMI	10月	-	49.3	48.0
11/7	外貨準備高	10月	-	\$417.2b	\$419.2b
11/11	GDP(季調済/前期比)	3Q F	-2.6%	-2.6%	-2.6%
11/17	失業率(季調済)	10月	3.8%	3.8%	3.9%
11/21	CPIコンボジット(前年比)	10月	2.1%	1.8%	4.4%
11/28	輸出(前年比)	10月	-8.0%	-10.4%	-9.1%
11/28	輸入(前年比)	10月	-6.4%	-11.9%	-7.8%
11/28	貿易収支(HKD)	10月	-39.0b	-20.9b	\$-44.9b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	7.0000	～	7.4000
	CNY/JPY	18.30	～	20.80
	100JPY/CNY	4.8300	～	5.4400

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 末吉 小絵

■ 先月の為替相場

11月のドル人民元(USDCNY)は年初来高値を更新後、方向感に欠ける展開。

USDCNYは1日、7.32レベルでオープン。PBOC仲値が前日対比300Pips以上元安方向の7.2台に設定され、実勢相場でも米金利上昇を受けたドル高元安が進行、同日、年初来高値である7.3280をつける。その後は7.25台まで戻す等荒い値動きが続き、2日夜間のFOMCを通過し再び7.32台まで上昇も4日には一時7.17台まで下落。

7日、7.23レベルでオープン。コロナ関連材料で元高が強まる場面が見られたが、7日以降は徐々に値を戻す動きとなって7.27台まで底堅い動き。その後、10日に発表された10月米CPIが予想対比下振れると、米金利急落を背景にドル売りが加速してUSDCNYは7.16近辺まで下落。11日には中国が隔離期間短縮措置を発表したことで防疫措置緩和期待に元高で反応、一時7.06台へ急落を見せた。

14日、7.08台半ばでオープン。前週末後半からの元高基調が継続し7.02台まで下落。その後週後半にかけては、Fed高官らの発言にドル高が強まった他、国内では15日発表の国内主要統計が予想を下回る結果となったことや、コロナ感染が増加していることも元安をサポートする材料となり、USDCNYは底堅く推移。17日夜間には一時7.16台へ上昇した。

21日、7.14台半ばでオープン。中国国内でのコロナ感染者数拡大を受けた人民元安と、FOMC議事録やFed高官発言などから利上げペース減速支持の見解が示されたことによるドル安が交錯し、USDCNYは7.13台から7.17台のレンジで方向感に欠ける値動き。25日夕方には預金準備率の0.25%引き下げが発表され、元安で反応も上昇は限定的となった。

28日、7.23レベルでオープン。週末のリスクオフの高まりも相まってオフショア主導でギャップオープンしたがゼロコロナ政策緩和期待や不動産セクター支援策が株式市場をサポートし7.15台へ急落。

■ 今月の見通し

12月のUSDCNYは引き続きボラタイルで方向感に欠ける展開を想定も上値は限定的と予想する。

米国では引き続きFedの利上げペースを巡る値動きが続くと想定される。12月に控えるFOMCでのドットチャートやパウエル議長発言から2023年の利上げ・利下げの時期や幅に関する新たな材料を探す展開か。USDCNYの見直しにおいて、米中の金融政策かい離がポイントの一つとなることには変わらず、長期的には利上げ終了時期が明確になるにつれてUSDの上昇圧力は弱まると考える。

他方、中国国内では北京や広州といった主要都市での感染者増加やそれに伴う防疫措置の強化が進んでいる。現在のところ感染者数が減少に転じる気配は見られておらず、USDCNYの底堅さにも影響を与えると予想。ただし、直近のマーケットではコロナ政策の緩和に関わるニュースの方に、より大きく反応するようになっており、急激に人民元高が進むリスクには留意しておきたい。11月中旬、隔離期間短縮を含むコロナ政策の見直しが発表された際も、発表を受けて1200Pips以上元高が進んだ。

コロナ感染拡大に伴う防疫措置や内需の弱まりによる経済停滞懸念も引き続き元安要因となっている。11月25日には不動産セクターに対する低利融資等のサポートや中国人民銀行による預金準備率引き下げ決定が行われており、「穏健」で「的を絞った」政策方針は継続すると考える。

基本的にはドル安要因と元安要因が混在することでUSDCNYは引き続きボラタイルで方向感が出にくい相場を予想。ただし、一方向に元安が進む場合には日次で設定されているPBOC仲値の市場予想対比元高設定も起こりうることから、上値については限定的と考える。

他、中国中央経済工作会议や海外投資家の証券投資フロー動向、中米貿易政策に関するニュース等にも注意しておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『『当地で2022年一番話題になったこと(人)』』

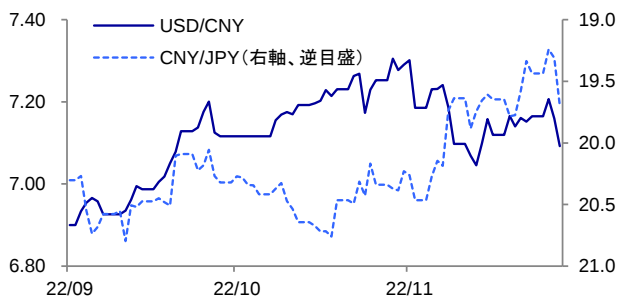
今年を振り返るとコロナに翻弄される一年でした。しかし、その中でも振り返ってみると、北京オリンピックは明るい話題として中国国内で大盛り上がりだったと思います。バブル方式が取られており、試合を見に行けなかったのは残念でしたが、連日テレビでは試合の中継やニュースが流れていました。

特に、「ビンドゥンダウン」というパンダのマスコットキャラクターが人気になり、関連グッズが売り切れ続出したことは皆さんもご存知かもしれません。私は上海に住んでいます。オリンピック期間中、街中でビンドゥンダウンの看板等は多く目にしたものの、グッズが売っているところを目にする機会はほとんどなかったような気がします。

また、オリンピック選手では谷愛凌選手が話題となりました。サンフランシスコ出身のアメリカ系中国人のスキー選手で、日本語だと「こく あいりょう」、中国語の読みだと「Gu Ailing」、英語名は「Eileen Gu」というそうです。今大会ではビッグエアで金、ハーフパイプで金、スロプスタイルで銀と3つもメダルを獲得しており、スキー種目を全く知らない私でもその強さは分かります。しかも、スタイル抜群でスキー選手だけでなくモデルとしても活動しているとのことで、オリンピックが終わっても、今後の活躍に注目すべき人だと思っています。

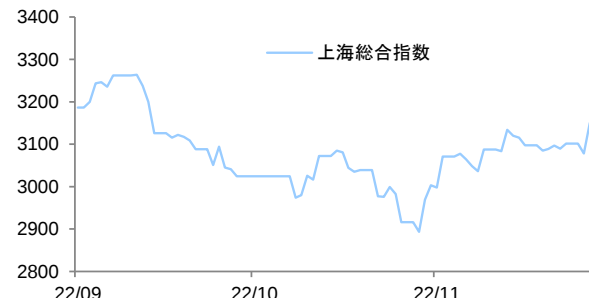
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/31	製造業PMI	10月	49.8	49.2	50.1
10/31	非製造業PMI	10月	50.1	48.7	50.6
11/7	貿易収支	10月	\$95.97b	\$85.15b	\$84.81b
11/9	PPI(前年比)	10月	-1.5%	-1.3%	0.9%
11/9	CPI(前年比)	10月	2.4%	2.1%	2.8%
11/15	小売売上高(前年比)	10月	0.7%	-0.5%	2.5%
11/15	鉱工業生産(前年比)	10月	5.3%	5.0%	6.3%
11/15	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	10月	5.9%	5.8%	5.9%
11/21	LPR1年物	-	3.65%	3.65%	3.65%
11/21	LPR5年物	-	4.30%	4.30%	4.30%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3570 ~ 1.4320
SGD/JPY 94.30 ~ 103.90

アジア・オセアニア資金部 成田 隼基

■ 先月の為替相場

2022年11月のUSD/SGD相場はSGD高が進行。

月初のSGDはやや軟調推移。3日、FOMCの声明文に、これまでの金融引き締め効果を考慮するとの文言が追加され市場はリスクオンで反応するも、直後の会見でパウエルFRB議長が利上げの最終到達点が想定より高くなる可能性に言及すると、USDは上昇。USD/SGDは一時、1.42台半ばの水準まで上昇した。

しかしその後、USD/SGDは反落。FOMC消化後のUSD高一服や、中国のゼロコロナ政策緩和への期待を受けて、一転してSGD高が進行。米金利の低下も相まって、USD/SGDは9日にかけて1.40割れの水準まで下落。

10日、USD/SGDは一時下げ止まるも、11日の米CPI後に再び下落する展開。米10月CPIが予想比下振れる結果を示し、米金利が低下したことを受けてUSD安SGD高が進行。中国におけるゼロコロナ政策の緩和への期待もSGDを支援した。USD/SGDは1.37割れの水準まで下落後、月半ばについてはレンジ推移に。米10月生産者物価(PPI)の下振れはUSD安要因となるも、ロシアのミサイルがポーランドに着弾したとの報道を受けてアジア通貨高の流れが巻き戻される展開。USD/SGDは1.37を挟み狭いレンジ推移となった。

その後のUSD/SGDは月末にかけて上値重く推移。中国におけるコロナ感染者数増加や北京市で死亡者が出たことが嫌気された。FRB高官から利上げペース減速を容認する発言が続き、センチメントが改善する場面も見受けられたが、中国における一部行動規制の強化の報道に打ち消される格好となり、USD/SGDは月末にかけて上値重く推移。USD/SGDは現在、1.37台前半の水準で推移している(30日午前時点)。

■ 今月の見通し

2022年12月のUSD/SGD相場はSGD安の進行を予想。

SGDは10月に行われたMAS会合以降、月次ベースでの上昇が継続している。これは、MASが毎会合で連続的に金融引き締め方向の発表を行ってきたことに加え、市場で米国の利上げの終着点が具体的に議論され始めた(米金利低下)ことなどが要因になっていると考えられる。

特に米10月CPIが発表されて以降、ドルインデックス自体が大きく下落しており、利上げの終着点が議論されること即ち市場のセンチメント良化要因となっている。シンガポール市場への強い資金流入に繋がり、足元のSGDは堅調推移となっている。

しかし、12月には年内最後のFOMCが控えており、米国では年内最後の利上げが発表されるであろうことや、中国発のテールリスクが台頭して来ている状況を勘案、SGDは軟調推移となることを予想。

予定通りであれば、次回MAS会合は来年4月に実施される予定。それを待たずして緊急会合が開かれ、更なる金融引き締めを発表する可能性は十分にあり得るものの、いずれにせよタイムラグがあり、米国のタカ派姿勢堅持に伴うドル高圧力に押される格好となろう。

また、中国発のテールリスクもSGD安要因となり得る。中国当局による厳格な行動規制について、抗議活動が日々勢いを増しており、治安要因を増員させるなど鎮静化の時期については不透明な状況。S\$NEERにおける人民元比率は高く、人民元安の進行は即ちSGD安要因となり得るだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で2022年一番話題になったこと(人)』

今年はコロナ禍からの正常化が進展し、3年ぶりの〇〇という枕詞をよく目にします。どれも大々的に取り上げられ、何が最も話題になったか決めづらいところ、National Day Paradeを見て感極まって涙している方の映像も記憶に新しいですが、念願の初参戦を果たし、個人的に思い入れのあるF1シンガポールグランプリについて書きたいと思います。

シンガポールグランプリは2008年に初のナイトレースとして開催されました。今年が13回目の開催、ファイナル当日は雨模様でしたが、過去最大の観客動員を記録したように大きな盛り上がりを見せておりました。今年の初めには新たに2028年まで開催契約が延長されたとの報道もありましたが、今やシンガポールを象徴するイベントと言っても過言ではないと思います。

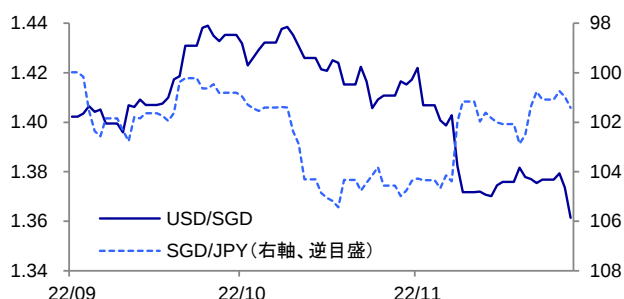
肝心のレースですが、ナイトレース×市街地コース、さらに路面のコンディションもよくないということで、オーバーテイクを仕掛けるような派手な展開こそ少なかったものの、観戦シートがコースの真横に設置され、数メートル先をレーシングカーが走っていく姿は圧巻。市街地コースならではの臨場感を感じることができ、非常に満足することができました。

もちろん、ナイトレースならではのお祭り感は十分で、洋楽に疎い私でも知っているようなアーティストがライブを行っており野外フェスに似たような感覚。F1レースそっちのけでライブを楽しむ方もいると聞いたことありますが、その気持ちも少し分かったような気がしました。

年末にかけても同じく3年ぶりにカウントダウンの花火が復活するようです。あらゆるところに人が増え、活気が戻ってきたと感じる場面は多いですが、〇年ぶりという枕詞を開かなくなり、この状態が日常として定着することを願っております。

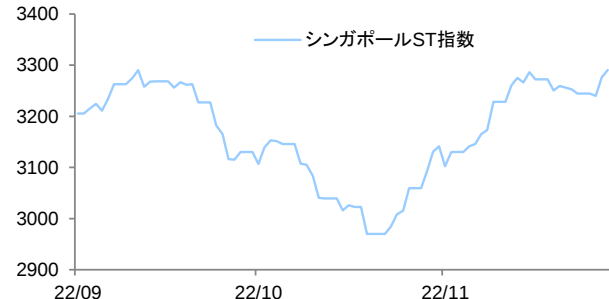
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/2	購買部景気指数	10月	49.8	49.7	49.9
11/4	小売売上高(前年比)	9月	10.8%	11.2%	13.3%
11/17	非石油輸出(前年比)	10月	-1.7%	-5.6%	3.1%
11/23	GDP	3Q	4.3%	4.1%	4.4%
11/23	CPI(前年比)	10月	7.0%	6.7%	7.5%
11/25	鉱工業生産	10月	-1.7%	-0.8%	1.6%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 34.00 ~ 36.50
THB/JPY 3.84 ~ 3.97

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 鈴木 一勲

■ 先月の為替相場

11月は長らく続いたドル高の巻き戻しが進み、ドルバーツは大きく下落。38バーツ近辺で取引を開始し、月初はドル売りが先行してFOMC前には37バーツ半ばへ下げた。FOMCでは、パウエル議長の会見がはっきりとタカ派だったため、一時ドル高へと切り返したが、米10月雇用統計で失業率の上昇、賃金上昇の鈍化が見られたため37バーツ前半まで下押しされて越週。7日はタイ10月CPIが僅かに予想を下回るが影響は乏しく、翌日以降は株価上昇を好感してセンチメントが改善。FRB利上げペース鈍化の思惑も重なり、米CPI前にもかかわらず36バーツ後半までドル安が進んだ。注目の米10月CPIはコアも含めて予想を下回り、全年限での米金利大幅低下と共にドル売りが持ち込まれ、36バーツ前半へと急落。

中旬、中国政府が隔離期間短縮を決定し、ドル人民元の急落に合わせてドルバーツは36バーツを割り込んだ。15日発表の米10月PPIも予想に届かず、CPIから立て続けに米物価指標が予想を下回ったことで一層のドル安が進むと、35バーツ半ばへ下落。しかし、NATO加盟国に対する露のミサイル攻撃というヘッドラインで地政学リスクが意識されて下げ止まった。また、FRB高官がより高い金利到達点について言及すると、低下していた米金利が反発してドルバーツも35.80台へ。

下旬、タイ3QGDPは2Qからの経済回復が進んでいる証左となったが、中国における新規感染者数の増加が止まらない中でセンチメントが悪化し、36バーツ台を回復。その後も上海市での規制強化の報道等がネックとなり、36バーツ前半へ上昇するも、23日は11月FOMC議事要旨が公表されて利上げペース鈍化を意識させる内容だったため米金利低下とドル安が進み、再び35バーツ後半へ沈んだ。週明け28日は中国政府に対するデモが懸念されてバーツ安へと振れたが、米金利が低下する動きや月末のタイ中銀MPCにて25bp利上げが行われ、米利上げ鈍化予想とタイ中銀が緩やかに利上げを続けることで米タイ金利差拡大が停止するとの思惑が強まり、35バーツ前半へと下げ幅を拡大。対ドルでは月間で約7.8%上昇し、1998年以来24年ぶりの月間上昇率を記録した。

■ 今月の見通し

12月のドルバーツ相場は外部環境主導で下値を探る展開を予想。既に米利下げペースの鈍化は市場に織り込まれているが、市場では利上げ停止が2023年半ば頃と見ていて、12月FOMC後これがどう変化するかがドルバーツ相場に大きく影響するだろう。FOMCでは、利上げに遅行する米経済への影響を注視しつつ政策を判断するというような内容で着地することがメインシナリオと考えるも、米11月CPIやPPI等が再び予想を下回るようならば、米金利低下・株高と共に更に利上げ鈍化が意識されて1ドル＝35バーツ割れも現実的になると予想。また、12月ということで投資家が利益確定に向けたドル売りに動く可能性も高く、当初想定よりも早いペースで回復しているタイの外国人観光客数と共にバーツをサポートする要因となり得る。

一方で、FRB高官からは市場の過度な期待感を払拭するかのごとく、11月下旬以降タカ派なコメントが出ている。実際、米の物価上昇要因は財価格からサービス価格によるものへと要因がシフトしており、サービス価格は財価格と比べて米労働者の給与アップの影響をより大きく受けるため、米経済は当面高い物価上昇圧力を受けると想定。そのため、インフレ抑制が喫緊の使命となっているFRBにとって、利上げ姿勢を崩すことはできず、こうした高官らのタカ派はコメントがドル高の巻き戻しに対するプレーキの役割を果たすだろう。また、中国における共産党集権体制に対するデモ活動や世界と逆行するゼロコロナ政策の堅持は人民元の影響を受けやすいタイバーツ等アジア通貨にとってネガティブに働く可能性があり、これもドルバーツを下支えすると見ている。

加えて、28日に発表されたタイ商務省の貿易統計では輸出入ともに前年同月比マイナスに転じており、製造業PMIでは先進国ほど同指標の悪化が大きく見られていることから、外需依存度が高いタイ経済の先行き不透明感が増せばバーツ安となる可能性も否定できない。

しかし、世界的にはドル高が転換点を迎えていると考えることから、12月のドルバーツは下方向の動きがメインと予想するも、米経済指標や高官発言次第でドル買いが盛り上がるということには注意したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で2022年一番話題になったこと(人)』

2022年で一番話題になったものはデザート「カオニャオ・マムアン」の一択ではないでしょうか。米国最大級の音楽フェスに初出場したタイ人女性ラッパーMILLIがライブの最後に食べたことで一気に世界での知名度が上がりました。

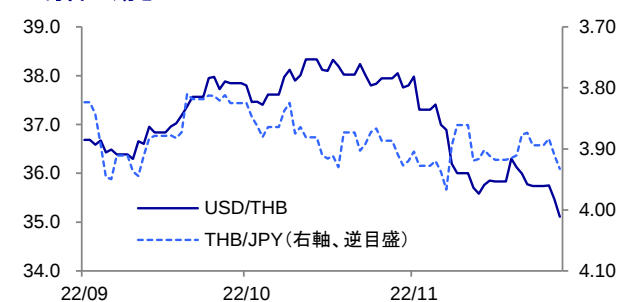
カオニャオ＝もち米、マムアン＝マンゴーを意味していて、甘く炊いたもち米とカットマンゴーをお皿に盛り付け、ココナッツミルクをかけて食べるデザートです。定番ながらタイ国内でもブームとなり、バンコクで有名なマンゴー専門店には音楽フェスの報道以降しばらくGrab等デリバリーの長い列が出来ていました。

マンゴーは好きだけれど、甘く炊いたお米はちょっと、...という方もいらっしゃるかもしれませんが(当初は私もそうでした)、甘いもち米もマンゴー、ココナッツミルクと共に食べると、マンゴーのみずみずしさ、もち米のモチモチ感、ココナッツミルクの甘味が合わさって何とも言えない美味しさです。調べてみると、日本でもタイ料理店ではかなりの確率で出会える一品ですので、ぜひタイのマンゴーが旬を迎える4～5月には是非ご賞味ください。

しかし、当地スタッフによると、もち米を砂糖で炊いているため、相当カロリーが高いとのこと。(美味しいものは脂肪と糖で出来ているから仕方ないですね！) 探せばほぼ1年中カオニャオ・マムアンに出会える当地では、食べ過ぎに注意します。

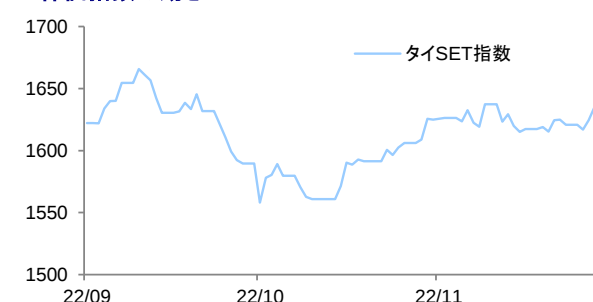
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/4	CPI YoY	10月	6.00%	5.98%	6.41%
11/4	CPI コア YoY	10月	3.20%	3.17%	3.12%
11/10	消費者信頼感指数	10月	-	40.0	38.6
11/21	GDP YoY	3Q	4.50%	4.50%	2.50%
11/24	自動車販売台数	10月	-	64,618	74,150
11/28	輸出(通関ベース)YoY	10月	5.50%	-4.40%	7.80%
11/28	輸入(通関ベース)YoY	10月	11.00%	-2.10%	15.60%
11/28	貿易収支(通関ベース)	10月	-\$1,400M	-\$596M	-\$853M
11/30	タイ金融政策委員会	-	1.25%	1.25%	1.00%

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.30	～	4.50
	MYR/JPY	30.58	～	32.05
	JPY/MYR	3.12	～	3.27

マレーシアみずほ銀行 内田 暎

■ 先月の為替相場

先月のリングギット相場は大幅に上昇しUSD/MYRは1ヵ月で6%を上回る大幅下落となった。

上旬は3日の馬中銀やその他主要国の政策金利発表を受けてUSD/MYRは25年ぶりとなる4.748の高値を更新するリングギットの展開。3日早朝発表FOMCでは4会合連続75bpの大幅利上げが決定。結果公表後の記者会見でパウエル議長は、利上げの最高到達金利が従来想定より上昇する可能性を示唆するタカ派の内容。リングギットが進展しUSD/MYRは4.75を向う水準まで上昇。その後15時に馬中銀発表の政策金利も4会合連続25bp利上げとなり、市場予想通りながら金利差拡大でリングギット優勢となった。

中旬以降はリングギットが値幅を伴って買戻された。10日発表の米10月CPIで市場予想を下回る内容だったことで米市場は株高、債券高、ドル安で反応。次回12月FOMCの75bp利上げ予想もほぼ打ち消される展開。11日には第3四半期GDPの成長率が前年同期比+14.2%となり、第2四半期の同+8.9%を大きく上回った。その後はミサイルのポーランド落下報道で値動きの荒い展開となると、同日発表された米10月PPIが市場予想を下回りUSD/MYRは一時4.5割れ水準まで下落。また、17日発表の10月貿易統計は、コロナ禍からマレーシア経済を牽引してきた輸出の伸び鈍化が確認された。発表直後の反応は限定的ながら今後のマレーシア経済先行きに対する不安材料と見做された。

下旬にかけてUSD/MYRは更なる一段下落。19日の第15回連邦下院議会選挙では単独政党で過半数議席を獲得した政党が存在しないハング・パーラメントで一気に政局不透明感が漂う展開。アブドラ国王は各政党党首との協議や各州の統治者を集めた会議を開催するなど混乱收拾に向けて調整役となり、24日に長年野党党首だった希望連盟のアンワル氏が第10代首相となった。USD/MYRはややハト派的内容だったFOMC議事要旨を織り込む形で約800ポイントの大幅下落となり、翌25日には一時4.45をワンタッチ。25日に発表された10月CPIは食品価格が前年比+7.1%、飲食店が+6.8%と引き続き大幅上昇したものの、ヘッドラインは市場予想を若干上回る+4.0%と前月から上昇幅は鈍化する結果となった。

■ 今月の見通し

今月のリングギットは米ドル動向と国内政局両睨みでの神経質な相場展開を予想する。

米国では13日に11月CPI、15日にFOMC発表を控える。足許市場参加者のコンセンサスは12月FOMC利上げ幅が50bpである一方、11月CPIでのインフレ落ち着き具合に注目が集まる。同指数の結果次第ではインフレ長期化リスクが再び意識され、連続的な大幅利上げによる米経済減速でスタグフレーション懸念で米ドルの下落リスクが高まることになろう。

国内では、長年野党党首を務めた希望連盟(PH)のアンワル氏が今回の第15回総選挙で政権交代を果たし新首相の座を射止めた。同氏はサバ、サラワク政党連合やザヒド総裁率いるUMNOを擁する国民戦線(BN)との連立与党結成により、議席数の3分の2を支持勢力に収めた格好だが、現時点では一枚岩となっていないことは明白であり、19日から再開される連邦議会での政権運営手腕に注目が集まる。前与党連合でイスマイルサブリ首相を擁立していた国民戦線(BN)は紆余曲折の末、与党連合の一角に残ることになったものの、総選挙での惨敗により連立与党内の発言力低下は避けられない。東マレーシアのサバ、サラワク政党連合との協力関係を強固にさせつつ、今次総選挙で大幅に議席数を伸ばした野党保守系第一党の全マレーシア・イスラム党(PAS)にも目配せしながらの政権運営となろう。アンワル政権の船出は決して順風満帆ではないものの、汚職政治からの脱却や財政規律の立て直しに対する国外投資家からの期待は目を追うごとに高まってきており、こうした追い風を味方につけられれば、海外投資家による投資フロー獲得と共にMYR見直し買いが進む可能性も十分あると見ています。

■ 今月のつづき(現地からの声)

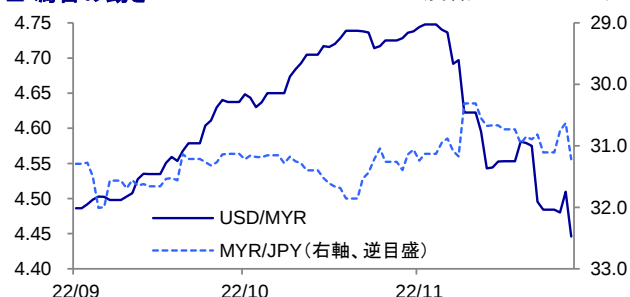
『当地で2022年一番話題になったこと(人)』

1982年に当時のマハティール首相は日本人の労働倫理、学習・勤労意欲、道徳、経営能力などを学びマレーシアの経済発展に繋げることを目指すことを提唱しました。所謂、『ルックイースト政策』のスタートであり、今年には同政策の40周年を迎える年です。同政策の下で日本とマレーシア間の交流は、経済的な協力関係に加え、マレーシア人留学生の日本派遣など人的交流も活発に行われております。一方、40年前当時のマレーシアは、1997年に始まるアジア通貨危機よりも前の時代であり、これほど前から日本を見習えと言ってくれていた国があり、現在その地に居ることができるのは、大変幸運であり、また一人の日本人として大変嬉しくもあります。

ルックイースト政策の提唱者であるマハティール元首相は、今年97歳にして第15回連邦下院議会の選挙に立候補しました。結果こそ残念でしたが、今も尚マレーシアを良くしたいという志を持ち立候補したその姿勢だけでも既に奇跡的だと思います。今回の選挙結果を踏まえマハティール元首相は政界から引退する意向を示しています。この40年間マレーシア経済の発展を牽引したリーダーが引退する話は、やはり今年一番のニュースであるとともに、2022年はルックイースト政策40周年として、今後のマレーシア日本の関係を方向づける大切な年であったと感じています。同記念事業に関わられている皆さまに対して敬意を表すると共に自分自身もマレーシア駐在員の一人としてマレーシア経済発展に貢献出来る様にこれからも頑張っていきたいと考えています。

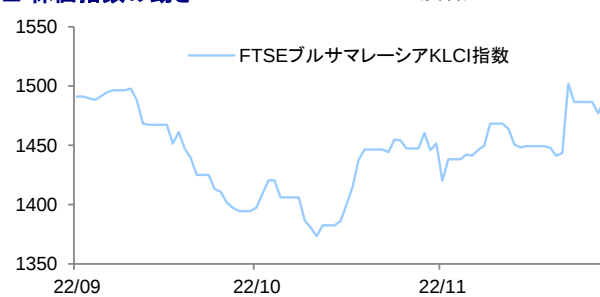
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/3	BNM Overnight Policy Rate	Nov	2.75%	2.75%	2.50%
11/7	Foreign Reserves	31-Oct	-	\$105.2B	\$104.5B
11/8	Industrial Production YoY	Sep	10.5%	10.8%	13.6%
11/11	GDP YoY	3Q	12.5%	14.2%	8.9%
11/11	GDP QoQ	3Q	0.8%	1.9%	3.5%
11/17	Exports YoY	Oct	24.60%	15.00%	30.10%
11/17	Trade Balance MYR	Oct	29.85B	18.09B	31.71B
11/22	Foreign Reserves	15-Nov	-	\$107.5B	\$105.2B
11/25	CPI YoY	Nov	3.90%	4.00%	4.50%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR	15500	～	15700
IDR/JPY	0.93	～	0.98
JPY/IDR	102.04	～	107.53

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 綱島 正侑記

■ 先月の為替相場

先月のルピアは下落。月初1日、ドルルピアは15600台半ばで取引を開始、発表されたインドネシア10月消費者物価指数は前年同月比5.71%の上昇となり、市場予想を下回る結果となったが市場の反応は限定的。アジア時間3日未明に予定されるFOMCを控える中、方向感に欠ける展開となり15600台前半から半ばで推移。FOMCの結果はハト派な内容を受け止められたが、その後のパウエル議長との会見において利上げ停止の検討は時期尚早とのコメントもありタカ派な内容。この結果を受け、3日アジア時間オープン後からルピアは対ドルで下落、翌4日もドル買いの流れが継続する中、ルピアは15700台前半まで下落幅を拡大。翌週7日、前週金曜海外時間に発表された米10月雇用統計の結果を受け、ドル売り優勢となる中アジア時間は15600台半ばまでルピアは上昇して取引を開始。しかしながらその後はドルが買い戻される展開となりルピアは15700近辺まで反落。発表されたインドネシア第3四半期GDPは前年同期比+5.72%となり引続き国内経済の力強さが確認される内容となったが、市場の反応は限定的。その後は10日海外時間に発表を控える米10月消費者物価指数の発表を控え、15600台後半を中心としたレンジ内で方向感なく推移。注目の結果は事前の市場予想を下回る内容となり、翌11日アジア時間オープンからルピアは対ドルで大幅に上昇し15500近辺で取引を開始し、一時15400近辺まで上昇幅を拡大。翌週14日からはドル売りに一服感も見られる中、ルピアは前週の上昇幅を縮小させる展開。15日に発表されたインドネシア10月貿易収支の結果は市場予想を上回る内容と見られたが、ドル買い戻しの動きに押されルピアは軟調な推移が継続。16日、ポーランドにミサイル着弾との報道を受け、リスク回避的な値動きとなる中、ルピアは15600近辺まで下落幅を拡大。17日、インドネシア中銀は0.5%の利上げを決定したが事前の予想通りの内容となり反応は限定的、むしろ前日海外時間に発表された米10月小売売上高の良好な結果を受けたドル買いに押されルピアは15600台後半まで下落。21日、中国での新型コロナウイルス感染拡大を受けリスク回避的な値動きとなる中、ベリー総裁が来年の経済成長率が4.37%に鈍化する可能性があるとのコメントしたこともありルピアは15700台前半まで下落。24日、FOMC議事要旨のハト派な内容を受けルピアは15600台前半まで上昇となったが、同水準では上値重く推移。翌週28日、引き続き中国での感染拡大を受けたリスク回避的な動きや、月末実需によるルピア売り等を受け、ルピアは15700台半ばまで下落。

■ 今月の見通し

12月のルピアは軟調な値動きを予想。先月来、米利上げペース減速に関する織込みが進みつつあり米ドルが軟調に推移している一方で、中国における感染拡大懸念等がルピアの重しとなっている状況。米金利低下、ドル売りの流れを受け他のアジア通貨は対ドルで上昇している一方、ルピアは対ドルで小幅に低下した。ドル高トレンドの中において比較的堅調に推移していたルピアに関しては対ドルでのショートポジションも比較的少なかったために買い戻しの動きが他通貨対比で限定的となったとも考えられるが、インドネシアの先行き不透明感が根底にあったのではと考える。足許でのインドネシア国内経済については第3四半期GDPが年率で+5.72%の成長となり引続き良好な環境にあり、中銀声明文も国内景気に関して自信を見せる内容となっている。しかしながら、ベリー総裁も来年の成長率については4.37%に鈍化するとコメントする等、来年以降については世界景気の減速等の影響を受け減速することが懸念されており見通しは不透明な状況が続く。これまで石炭価格の高騰がインドネシア経済をサポートしてきた側面は大きく、直近で石炭価格も上値の重さが意識され始めており、石炭価格の下落が続く様であればインドネシア経済減速の要因の一つとなり得るだろう。加えて2024年には大統領選挙も予定されており、過去選挙前には直接投資額が減る傾向があることも踏まえれば海外からの直接投資も減少することが予想され、さらには米国利上げによって金利差が縮小している現状ではインドネシアの投資魅力が過去対比低下しており米国の利下げに動き始めるまでは証券投資の流出も継続しよう。短期的に米利上げペースの減速を受けルピアが対ドルで上昇する局面は想定されるものの、先行き不透明感が漂う中でルピアは軟調に推移するものと予想。

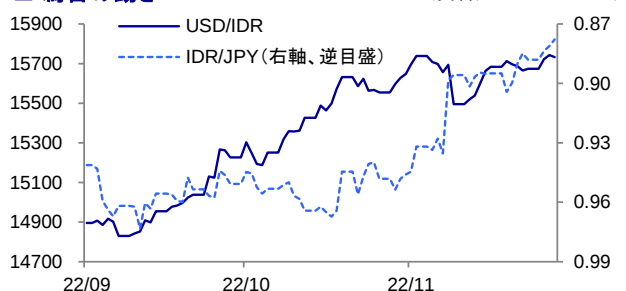
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で2022年一番話題になったこと(人)』
長い間、アナログTVからデジタルへの移行を試みてきた当地が、アナログ技術に多額の投資を行ってきた国内の主要放送局からの抵抗により、予定より7年も遅れましたが、2022年11月2日によりやくアナログTVからデジタルTVに移行しました。
この移行に関する取り組みはアナログ・スイッチ・オフ(ASO)プログラムと呼ばれ、国内の放送サービスエリアにおいて、デジタル放送への移行の準備が整ったサービスエリアから、順次にデジタル移行が行います。デジタル放送に切り替える理由の一つは、質の高い放送を国民に提供することです。デジタル放送は、アナログ放送に比べて、より鮮明で鮮明な映像と音声を楽しめます。しかし、デジタル放送は電波が悪いと映像や音声にノイズが入るアナログ放送とは異なり、受信機が送信塔からの電波を受信しなければ全く放送されません。デジタル放送対応テレビの普及がなかなか進まないなか、ASOプログラム対象エリアに住む貧困層向けに、アナログテレビでもデジタルテレビ放送の受信を可能にするセットトップボックス(STB)を約670万台用意しています。

(インドネシアみずほ銀行 アストリッド)

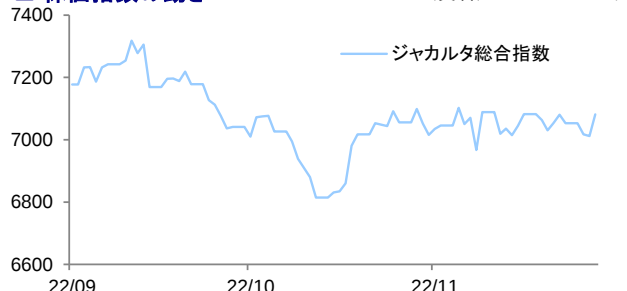
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	CPI(前年同月比)	10月	5.98%	5.71%	5.95%
11/7	貿易収支(USD M)	10月	4,500	5,670.00	4,990
11/15	輸出(前年比)	10月	13.50%	12.30%	20.28%
11/15	輸入(前年比)	10月	24.00%	17.44%	22.02%
11/15	BI 7daysリバースレポ金利	-	5.25%	5.25%	4.75%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 557.00 ~ 59.00
JPY/PHP 0.39 ~ 0.42

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榎 雄一郎

■ 先月の為替相場

10月末にペソは約1か月ぶりの高値まで大幅上昇となっていたが、11月のFOMC後のパウエル議長の記者会見内容が総じてタカ派な内容となり、政策金利のピークが従来予想よりも高い水準となり、長く維持されとの見方からペソは1米ドル＝58ペソ台後半まで下落。フィリピンの10月の消費者物価指数は前年同月比で7.7%と市場予想を上回り、約14年ぶりの水準まで加速したがフィリピン中銀のメダラ総裁は米国に追隨して、11月会合にて75BPの利上げを実施するとの考えを示したことからペソ売りは限定的となったほか、9月の貿易赤字が輸出増加・輸入減少を受けて前月の過去最大額から赤字幅が減少したことよりペソは上昇に転じ、11月上旬は1米ドル＝58ペソ台での推移となった。

フィリピンの第3四半期のGDPは前年同期比+7.6%と市場予想を上回る強い内容となったことから、インフレ加速が続くなか、フィリピン中銀が来年も利上げを継続するとの見方が広がったことがペソ買い材料となったほか、米インフレ鈍化から米金融当局の利上げペース減速観測が高まり、ドル大幅安となったことや中国がコロナ関連措置を緩和したことによるセンチメント改善から1米ドル＝57ペソ台前半まで急伸。その後は米当局者から米利上げペース減速期待を牽制するタカ派コメントが相次いだことから、ペソは上値の重さを見せたほか、18日にフィリピン中銀は75BPの大幅利上げを決定したが、事前予想通りとなり、影響は限定的となるなど、中旬は方向感に欠ける展開が継続し、狭いレンジでの推移となった。

中国のコロナ感染者数増加や複数米当局者が積極的な利上げ継続に懸念を示すなど、強弱材料が混じるなか、メダラ総裁が利上げペース減速の準備はできているとの見解を示したことを好感し、フィリピン株式が上昇ペースを加速させるなど、域内への資金流入を受けてペソは1米ドル＝56ペソ台まで上昇。FOMC議事要旨にてハト派寄りの傾向が明らかになったことからセンチメントが改善したほか、フィリピンの10月の財政赤字は991億ペソとなり、前月の1,798億ペソから赤字幅が縮小したこともサポートとなり、ペソは堅調に推移し、1米ドル＝56ペソ台半ばで月の取引を終え、月次上昇幅としては2016年3月以来の大幅上昇となった。

■ 今月の見通し

ドルの底堅さや貿易赤字高止まりが引き続きペソ安圧力となるも、当局のペソ防衛スタンスからペソ下値は限定的との見方。

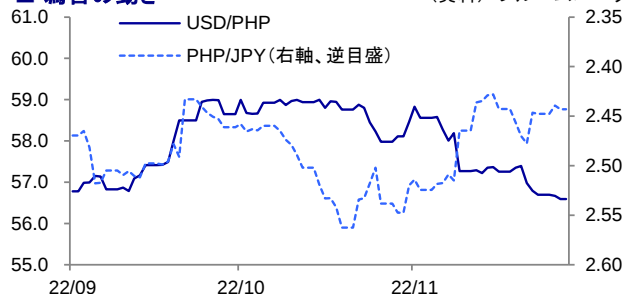
米消費者物価指数がインフレ減速の兆候を示唆する内容だったことを受け、米当局のハト派転期待から米金利が急速に低下し、ドルも下落しているが、当局者からハト派期待をけん制する発言が相次いでおり、12月会合では50BPに利上げ幅を変更したうえで、当面利上げを継続する方針と考えられ、ドル上昇トレンドが転換したとは考えにくい。11月のFOMCでは政策金利のピーク水準が従来よりも高くなる可能性のほか、緩やかな利上げを長く続けるスタンスが確認されており、利上げペース減速からドル上昇ペースはこれまでに比べて、緩やかになるとの見方であるが、ドル上昇基調は継続との見方は変わらず。

また、フィリピンの経済活動回復による輸入増加と地政学的リスクが煽るなか国際商品価格が高止まりしていること、加えて景気減速懸念を受けた輸出の伸び悩みといった環境を鑑みると経常赤字拡大の基調が変わったとも言えず、高水準の貿易赤字や国内インフレ加速が引き続きペソ安圧力となろう。

一方、フィリピン中銀は他新興国に比べて十分な外貨準備を保有しており、為替介入強化や米国との金利差縮小を回避するため、米国の政策動向に追隨する政策スタンスを取るなど、ペソ安防衛のための取り組みを継続しているほか、海外在留労働者からの送金需要が増加する季節性を鑑みると、当面は底堅い展開を見込む。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ:

USD/INR 80.00 ~ 84.50
INR/JPY 1.67 ~ 1.83

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【11月の米ドル/インドルピーは下落した後、幾分取り戻した】

不動産セクターの混乱とゼロコロナ政策による景気懸念が続く中国を見ながら82.735で11月の取引を開始。注目されていたFOMCは事前予想通りの0.75%上げとなったが、パウエル議長が利上げの停止について「非常に時期尚早」だと述べたことからタカ派での受け取りとなった。これを受け、3日に当月高値となる82.93を示現。ただ、当局からのドル売り為替介入警戒感も強く、大台83に乗せるには至らず。

週明け7日には人民元以外のアジア通貨が全般的に上昇、Sensexも61,100を突破するなどリスク選好ムードでドル/ルピーも82を割り込む。8日のムンバイ祝日を挟んで9日には米中間選挙への懸念や既存のドル買い持ちポジションの調整が出ると81.22まで下落。ただ同水準では地場輸入企業のドル買いが殺到し、水準を戻しにいく展開。その後、事前予想比較調な展開となった米消費者物価を通過するとドル安主導でルピー高となり、当月安値となる80.58まで下落して越週。

三週目は週初からインド大手コングロマリットが大量のドル買いを出しているとの話しに一本調子で上昇、81を難なく回復。印-米金利差縮小を背景にドル/ルピーのフォワードプレミアムは11年ぶり水準まで低下。輸入サイドが替予約のコスト減を背景に輸入企業からドル買いが出る展開で81台後半まで回復。

四週目に入ると中国のコロナ規制最強化を受け、人民元をはじめとするアジア通貨が全般的に軟調。月曜には81.915まで上昇。月末にかけては材料難で小動き。81.72で29日の取引時間を終えた。

■ 今月の見通し

【12月の米ドル/インドルピーは上昇する展開を予想】

11月は米消費者物価をトリガーとして大幅なドル安調整が進んだ。ただ、米利上げ動向について見れば、今次の一連の利上げの終点となるレートは4.75-5.00または5.00-5.25%との予想が広く支持されている状況に変わりは無い。換言すれば現状水準から1%程度の利上げが織り込まれている状況であり、利上げ停止が今すぐに行われるという状況ではない。この点、米短期国債の利回りが低下していないのを見れば明らかであり、米利上げ観測後退からのドル安といった現在の報道には甚だ疑問である。ではなぜ米債利回りは低下せず為替市場ではドル安という“ちぐはぐ”なことが起こっているのか？ということになるが、「投資家たちが年末休暇入りに伴ってドル買いポジションの調整を行う中でドル売りを出した」、あるいは「10月までのドル高が行き過ぎだった」、というのがそれぞれ説明だろう。

12月の米物価指標とFOMCの内容次第という面もあるが、土台2023年春までの米政策金利上げのシナリオが崩れていない状況で本格的なドル安への調整を展望するには時期尚早であろう。

併せて中国のゼロコロナ政策に伴う景気減速・政治不安、またウクライナ国境付近のポーランド国土にミサイルが着弾し死者が出るなど、地政学リスクの高まりにも注目。これらが意識されるような場面では、どうしてもリスク回避の中で新興国通貨売り/ドル買いが避けられず、ルピーにも影響が出る。

国内要因で為替市場へ影響を与えそうなのは原油価格の動向。プレントは11月28日に83.19ドルと9月につけていた安値を抜け、3月の高値を起点に35%程度の調整が入ったことになる。貿易収支は今年度の月平均で259億ドルの赤字、年度合計では1,800億ドルを超える赤字を計上した。このフローがドル買い/ルピー売りを行いルピー安の要因の1つとなっていた。輸入企業は原油価格のヘッジをしていることから、原油相場が実際の輸入価格に即座反映するわけではないものの、価格の継続的な下落は貿易赤字縮小要因となり、その先にあるドル買い縮小を想起させる。この点については12月4日のOPECプラスで減産合意が出るかに注目。

12月のドル/ルピー相場は米利上げ継続シナリオが崩れないことを背景に現状レベルからはドル高基調想定。副材料として地政学リスク顕在化があれば一段とドル高。資源価格下落が続けばルピー下支え要因となり幾分ドル高緩和、といったスタンスで臨みたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で2022年一番話題になったこと(人)』

正直話題に困ったが、そういえばバンガロールは雨が多いなあと。

9月、インドのIT都市と呼ばれるバンガロールは過去数十年で最も激しいと言われる雨に見舞われた。腰の高さまでの浸水被害を被った地区もあり、水浸しの道路を渡り、家の中から脱出せざるを得ない人々もいた。この期間に市内を移動せざるを得なかった人達はそれぞれに浸水被害の状況を共有しあい、できるだけスムーズに目的地に到達できるよう協力し合っていた。

水へのアクセスが良くない印象のインドだが、洪水は結構頻繁起こっている。

数年前芥川賞を受賞した「百年泥」の舞台となったのも、南インドチェンナイの100年に一度といわれる洪水である。

ぐんぐん水位の上がる川の様子をオフィスの窓から見ていた。その場にいたのだ。

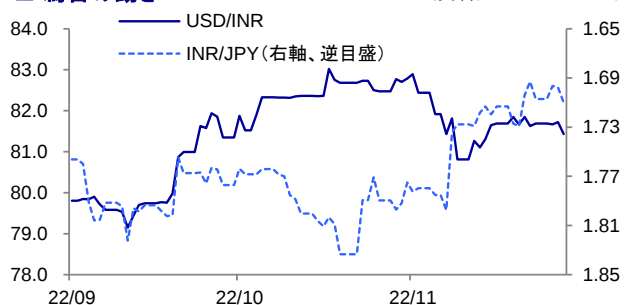
この為通常より早い退社となったが、既に道路は渋滞していた。水が押し寄せる道路には波が立ち、多くの車が立ち往生し、警官が交通整理していた。自宅の電気は止まり、筆者の家には隣家の人が充電を頼みに来た。同じ建物なので電気が止まっているのはお互い様なのだが。

インフラ整備の行き届かないインドはしょっちゅうどこかで水の被害が発生している。

なので、一番というより「よく」話題にはなる。(バンガロール支店 近藤)

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	製造業PMI	10月	-	55.3	55.1
11/11	鉱工業生産	9月	2.0%	3.1%	-0.7%
11/14	CPI	10月	6.70%	6.77%	7.41%

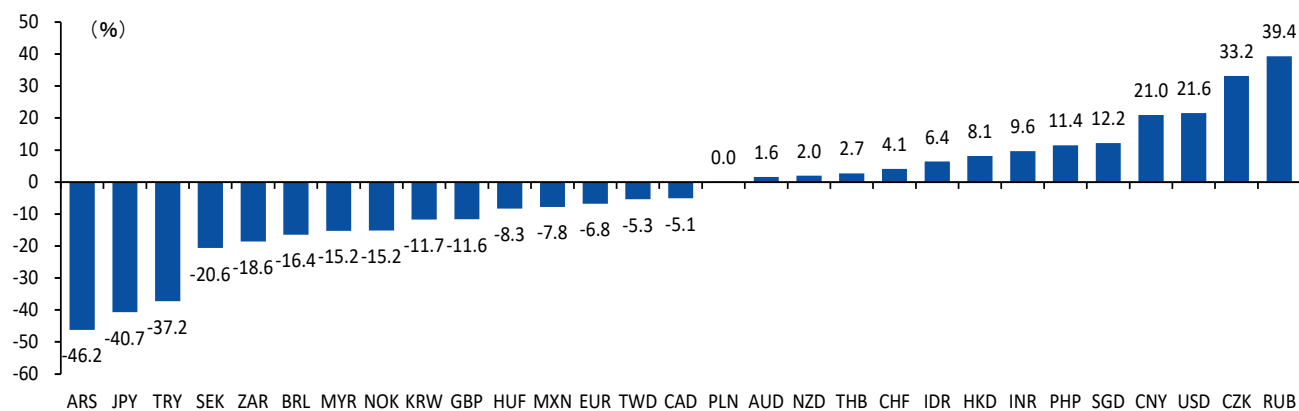
(資料) ブルームバーク

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2021年末	2022年11月末	騰落率	株式市場	2021年末	2022年11月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	36338.3	34589.77	-4.8%	-
日本	USD/JPY	115.08	138.07	20.0%	日経平均株価	28791.71	27968.99	-2.9%	-19.0%
ユーロ圏	EUR/USD	1.137	1.0406	-8.5%	ドイツDAX指数	15884.86	14397.04	-9.4%	-9.4%
英国	GBP/USD	1.3532	1.2058	-10.9%	ロンドンFTSE100指数	7384.54	7573.05	2.6%	15.1%
豪州	AUD/USD	0.7263	0.6788	-6.5%	S&P/ASX200指数	7444.642	7284.173	-2.2%	4.7%
カナダ	USD/CAD	1.2637	1.3412	6.1%	S&PTロント総合指数	21222.84	20453.26	-3.6%	-9.2%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.3561	7.0924	11.6%	上海総合	3639.775	3151.335	-13.4%	-22.4%
香港	USD/HKD	7.7966	7.8098	0.2%	香港ハンセン	23397.67	18597.23	-20.5%	-20.7%
インド	USD/INR	74.3375	81.4287	9.5%	インドSENSEX30種	58253.82	63099.65	8.3%	-1.1%
インドネシア	USD/IDR	14263	15732	10.3%	ジャカルタ総合	6581.482	7081.313	7.6%	-2.5%
韓国	USD/KRW	1189.88	1318.38	10.8%	韓国総合株価	2977.65	2472.53	-17.0%	-25.1%
マレーシア	USD/MYR	4.1665	4.446	6.7%	ブルサマレーシアKLCI	1567.53	1488.8	-5.0%	-11.0%
フィリピン	USD/PHP	50.992	56.592	11.0%	フィリピン総合	7122.63	6780.78	-4.8%	-14.2%
シンガポール	USD/SGD	1.349	1.3614	0.9%	シンガポールST	3123.68	3290.49	5.3%	4.4%
台湾	USD/TWD	27.674	30.816	11.4%	台湾加権	18218.84	14879.55	-18.3%	-26.7%
タイ	USD/THB	33.211	35.11	5.7%	タイSET	1657.62	1635.36	-1.3%	-6.7%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2022年10月時点)



■ 実質GDP成長率

	2021Q1	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2020	2021
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	6.3	7.0	2.7	7.0	-1.6	-0.6	2.9	-2.8	5.9
日本*	-1.3	2.0	-2.5	4.1	0.2	4.6	-1.2	-4.7	1.8
ユーロ圏	-0.8	14.2	3.9	4.8	5.5	4.3	2.1	-6.1	5.3
英国	-7.8	24.3	8.5	8.9	10.9	4.4	2.4	-11.0	7.5
豪州	1.5	9.8	4.1	4.5	3.3	3.6		-2.2	5.0
カナダ*	5.3	-2.3	5.9	6.9	2.8	3.2	2.9	-5.1	5.2
エマージングアジア									
中国	18.3	7.9	4.9	4.0	4.8	0.4	3.9	2.2	8.1
香港	8.0	7.6	5.4	4.7	-3.9	-1.3	-4.5	-6.5	6.3
インド	2.5	20.1	8.4	5.4	4.1	13.5		6.8	6.5
インドネシア	-0.7	7.1	3.5	5.0	5.0	5.5	5.7	-2.0	3.7
韓国	2.2	6.2	4.0	4.2	3.0	2.9	3.1	-0.7	4.1
マレーシア	-0.5	15.9	-4.5	3.6	5.0	8.9	14.2	-5.6	3.1
フィリピン	-3.8	12.1	7.0	7.8	8.2	7.5	7.6	-9.5	5.7
シンガポール	2.0	15.8	7.5	6.1	3.9	4.5	4.1	-4.1	7.9
台湾	9.3	7.9	4.1	5.2	3.9	3.0	4.0	3.4	6.5
タイ	-2.4	7.7	-0.2	1.8	2.3	2.5	4.5	-6.2	1.5

(注)インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	22/03	22/04	22/05	22/06	22/07	22/08	22/09	22/10	2020	2021
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.6	3.6	3.6	3.6	3.5	3.7	3.5	3.7	8.1	5.4
日本	2.6	2.5	2.6	2.6	2.6	2.5	2.6	2.6	2.8	2.8
ユーロ圏	6.8	6.7	6.7	6.7	6.7	6.7	6.6		8.0	7.7
英国	3.7	3.8	3.8	3.8	3.6	3.5	3.6		4.5	4.6
豪州	3.9	3.9	3.9	3.5	3.4	3.5	3.5	3.4	6.5	5.1
カナダ	5.3	5.2	5.1	4.9	4.9	5.4	5.2	5.2	9.6	7.4
エマージングアジア										
中国									4.0	3.9
香港	5.0	5.4	5.1	4.7	4.3	4.1	3.9	3.8	5.5	5.4
インドネシア									6.0	6.4
韓国	2.7	2.7	2.8	2.9	2.9	2.5	2.8	2.8	4.0	3.7
マレーシア	4.1	3.9	3.9	3.8	3.7	3.7	3.6		4.5	4.6
フィリピン	5.8	5.7	6.0	6.0	5.2	5.3	5.0		10.4	7.8
シンガポール	2.2	2.2	2.2	2.1	2.1	1.9	2		3.0	2.7
台湾	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.6	3.6	3.9	4.0
タイ		1.4			1.2				1.7	

(資料)ブルームバーグ、Macrobond、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	22/02	22/03	22/04	22/05	22/06	22/07	22/08	22/09	22/10	2020	2021
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	7.9	8.5	8.3	8.6	9.1	8.5	8.3	8.2	7.7	1.2	4.7
日本	0.9	1.2	2.5	2.5	2.4	2.6	3.0	3.0	3.7	0.0	-0.3
ユーロ圏	5.9	7.4	7.4	8.1	8.6	8.9	9.1	9.9	10.6	0.3	2.6
英国	6.2	7.0	9.0	9.1	9.4	10.1	9.9	10.1	11.1	0.9	2.6
豪州		5.1			6.1			7.3		0.9	2.9
カナダ	5.7	6.7	6.8	7.7	8.1	7.6	7.0	6.9	6.9	0.7	3.4
エマージングアジア											
中国	0.9	1.5	2.1	2.1	2.5	2.7	2.5	2.8	2.1	2.5	0.9
香港	1.6	1.7	1.3	1.2	1.8	1.9	1.9	4.4	1.8	0.3	1.6
インド	6.1	7.0	7.8	7.0	7.0	6.7	7.0	7.4	6.8	6.6	5.1
インドネシア	2.1	2.6	3.5	3.6	4.4	4.9	4.7	6.0	5.7	2.0	1.6
韓国	3.7	4.1	4.8	5.4	6.0	6.3	5.7	5.6	5.7	0.5	2.5
マレーシア	2.2	2.2	2.3	2.8	3.4	4.4	4.7	4.5	4.0	-1.1	2.5
フィリピン	3.0	4.0	4.9	5.4	6.1	6.4	6.3	6.9	4.0	2.4	3.9
シンガポール	4.3	5.4	5.4	5.6	6.7	7.0	7.5	7.5	6.7	-0.2	2.3
台湾	2.3	3.3	3.4	3.4	3.6	3.4	2.7	2.8	2.7	-0.2	2.0
タイ	5.3	5.7	4.7	7.1	7.7	7.6	7.9	6.4	6.0	-0.8	1.2

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2021Q1	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2020	2021
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.1	-3.3	-3.4	-3.5	-3.8	-3.9		-2.9	-3.6
日本	3.1	4.0	4.2	4.0	3.7	3.1	2.5	2.9	4.0
ユーロ圏	2.4	2.8	2.8	2.4	1.6	0.6		1.7	2.4
英国	-3.2	-3.2	-3.5	-2.0	-3.3	-4.3			
豪州	3.0	3.1	3.5	3.2	2.4	2.3		2.4	3.2
カナダ	-1.3	-1.0	-0.6	-0.3	-0.2	0.0	-0.3	-2.2	-0.3
エマージングアジア									
中国	2.3	1.9	1.9	1.8	1.8	2.1	2.5	1.7	1.8
香港	9.3	9.5	9.2	11.3	12.0	10.6			
インド	0.9	0.4	-0.5	-1.1	-1.2	-2.1		1.3	-1.1
インドネシア	-0.2	-0.1	0.3	0.3	0.4	0.9	0.8	-0.4	0.3
韓国	4.9	5.6	5.8	5.1	4.7	4.2			
マレーシア	4.5	4.8	3.8	3.5	2.8	2.1	2.1		
フィリピン	3.4	1.8	0.3	-1.8	-2.8	-4.5			
シンガポール	16.8	16.7	17.0	18.1	19.7	19.4	19.5	16.8	18.1
台湾	14.6	15.2	14.5	14.7	15.0	14.4	13.8	13.9	14.6
タイ	1.7	0.8	-1.6	-2.1	-2.2	-3.4			

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	3.75-4.00	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2022/11/2	+75bp	2022/11/2	+75bp
日本	当座預金残高の政策金利	-0.10	緩和: 2008/10/30	0.30	2016/1/29	-20bp	2022/10/28	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	1.50	引き締め: 2022/7/21	-0.50	2022/10/27	+75bp	2022/10/27	+75bp
英国	バンク・レート	3.00	引き締め: 2021/12/16	0.10	2022/11/3	+75bp	2022/11/3	+75bp
豪州	キャッシュ・レート	2.85	引き締め: 2022/5/3	0.10	2022/11/1	+25bp	2022/11/1	+25bp
カナダ	翌日物金利	3.75	引き締め: 2022/3/2	0.25	2022/10/26	+50bp	2022/10/26	+50bp
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.65	緩和: 2012/6/8	6.31	2022/8/22	-5bp	2022/11/21	現状維持
インド	翌日物レポ金利	5.90	引き締め: 2022/5/4	4.00	2022/9/30	+50bp	2022/9/30	+50bp
インドネシア	7日物リバースレポレート	5.25	引き締め: 2022/8/23	3.50	2022/11/21	+50bp	2022/11/17	+50bp
韓国	7日物レポ金利	3.25	引き締め: 2021/8/26	0.50	2022/11/24	+25bp	2022/11/24	+25bp
マレーシア	翌日物金利	2.75	引き締め: 2022/5/11	1.75	2022/11/3	+25bp	2022/11/3	+25bp
フィリピン	翌日物金利	5.00	引き締め: 2022/5/19	2.00	2022/11/17	+75bp	2022/11/17	+75bp
台湾	再割引金利(公定歩合)	1.625	引き締め: 2022/3/17	1.125	2022/9/22	+12.5bp	2022/9/22	+12.5bp
タイ	翌日物レポ金利	1.25	引き締め: 2022/8/10	0.50	2022/11/30	+25bp	2022/11/30	+25bp
ベトナム	リファイナンス金利	6.00	引き締め: 2022/9/22	4.00	2022/10/25	+100bp	2022/10/25	+100bp

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行